松本市文化財調査報告No.178

長野県松本市

SHIOKURAIKE
TSUKAYAMA

塩倉池遺跡Ⅳ
塚山古墳群

—緊急発掘調査報告書—

慶應大学図書館所蔵
受贈利行館

2005.3

松本市教育委員会

長野県松本市

SHIOKURAIKE
TSUKAYAMA

塩倉池遺跡Ⅳ
塚山古墳群

—緊急発掘調査報告書—

2005.3

松本市教育委員会

塩倉池遺跡・塚山古墳群調査区全景（上が北）

1号墳周溝全景（右が北）

2号墳周溝全景、3号墳周溝北側部分（上が北）

序

塩倉池遺跡は松本市の北部に位置し、塩倉池の周辺一帯に拡がる遺跡です。本遺跡はこれまでに３回の調査が行われ、今回で４回目の調査となります。また遺跡内には塚山古墳が位置しています。

このたび当地に特別養護老人ホーム「浅間つつじ荘」の移転改築が計画されたため、松本市が松塩筑木曽老人福祉施設組合から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は平成16年１月から４月にかけて行われました。寒い時期の調査となりましたが、関係の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、塚山古墳はもともと直径30mの円墳であり、この他にも２基の円墳が存在していたことが判明しました。また古墳の周溝からは県内でも珍しい５世紀代の須恵器が発見されました。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変重要な資料になることと思われます。

しかしながら、発掘調査をして記録保存することは、遺跡を破壊しているという側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされるのは大変貴重なことだと思います。

最後になりましたが、厳しい寒さのなか発掘調査にご協力をいただいた参加者の皆様、また調査に際しては多大なご理解とご協力をいただいた、松塩筑木曽老人福祉施設組合の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年３月

松本市教育委員会　教育長　竹　淵　公　章

例　言

1　本書は、平成16年1月8日から平成16年4月16日にかけておこなわれた、松本市大字岡田下岡田677番1ほかに所在する塩倉池遺跡・塚山古墳群の発掘調査報告書である。

2　本調査は特別養護老人ホーム「浅間つつじ荘」の移転改築に伴って松塩筑木曽老人福祉施設組合より松本市に委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行なったものである。

3　本遺跡は平成15年度から平成16年度にかけて発掘調査を行い、平成16年度に報告書の作製を実施した。

4　本書の執筆分担は次の通りである。

第Ⅰ章：事務局

第Ⅱ章Ⅰ節：森　義直

第Ⅱ章Ⅱ～Ⅲ節、第Ⅲ章Ⅰ～Ⅲ節：菊池保夫、小山貴広

第Ⅳ章：菊池保夫

5　本書の作成・編集にあたっての作業分担は次の通りである。

遺物洗浄接合：中澤温子、竹平悦子、百瀬二三子

土器実測・トレース：竹平悦子、竹内直美、八板千佳

石器実測・トレース：翌月映

金属器整理・実測・トレース：洞澤文江

遺構図整理トレース：小山貴広、村山牧枝、中川佳子

写真撮影：（現場写真）菊池保夫、和田和哉、太田圭郁、山本紀之、小山貴広

（遺物写真）宮嶋洋一

（航空写真）株式会社　地図測量

編集：菊池保夫、小山貴広

6　本書の中で使用した遺構名の呼称は次の通りである。

第○号住居址→○住　塚山○号墳→○号墳　第○号土坑→土○　第○号ピット→Ｐ○

第○号溝址→溝○　第○号溝状遺構→溝状○　○号墳周溝→○墳周

7　遺構図においては炭・焼土範囲を、遺物においては剥離した面をトーンによって区別した。

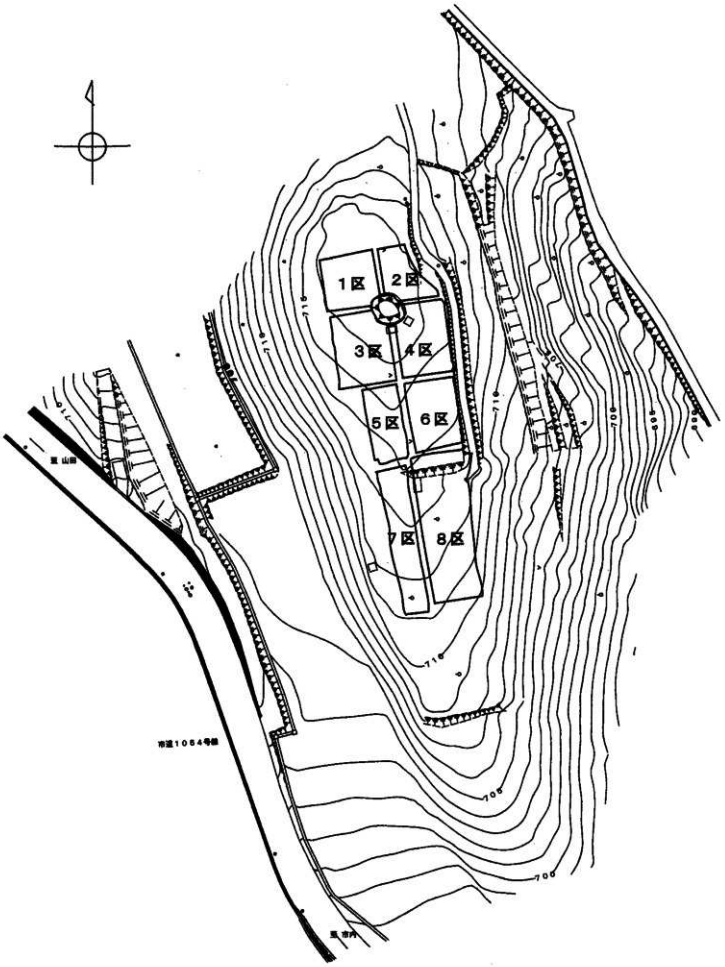
8　図中の方位記号は全て真北を指している。

9　表中の（　）は現存値を示している。

10　本調査における出土遺物及び現場で作成した測量図、写真等の諸記録は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館（〒390-0823　長野県松本市大字中山3738番地1　TEL 0263-86-4710）に保管・収蔵されている。

目　次

序
例言
目次
第Ⅰ章　調査の経緯
　第Ⅰ節　調査に至る経緯 …… 2
　第Ⅱ節　調査体制 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第Ⅰ節　塩倉池遺跡・塚山古墳群の地形・地質 …… 5
　第Ⅱ節　歴史的環境 …… 7
　第Ⅲ節　過去の調査の概要 …… 8
第Ⅲ章　調査結果
　第Ⅰ節　調査の概要 …… 10
　第Ⅱ節　遺構
　　1　古墳 …… 11
　　2　竪穴住居址 …… 12
　　3　土坑 …… 14
　　4　ピット …… 14
　　5　溝址・溝状遺構 …… 14
　第Ⅲ節　遺物
　　1　土器 …… 18
　　2　石器・鉄器 …… 20
第Ⅳ章　調査のまとめ …… 21
付編
　塩倉池遺跡の自然科学分析 …… 22
写真図版
報告書抄録



第１図　調査位置図　　S=1/1000

第Ⅰ章　調査の経緯

1．調査に至る経緯

松本市大字岡田下岡田677番地１ほかの一帯に松塩筑木曽老人福祉施設組合によって特別養護老人ホーム「浅間つつじ荘」移転改築事業が計画された。事業地は、旧石器から平安時代までの複合遺跡として周知されている塩倉池遺跡の範囲に該当しており、また塚山古墳が事業地内に含まれていた。このため松本市教育委員会では事業者と埋蔵文化財の保護について協議を行い、その結果発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。

発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、松塩筑木曽老人福祉施設組合と松本市との間に平成15年12月１日付で発掘業務の委託契約が締結された。現地での発掘調査は、平成16年１月８日から平成16年４月19日まで行なわれた。発掘調査終了後は、引き続き松本市教育委員会が整理作業及び調査報告書の刊行等を行なった。

2．調査体制

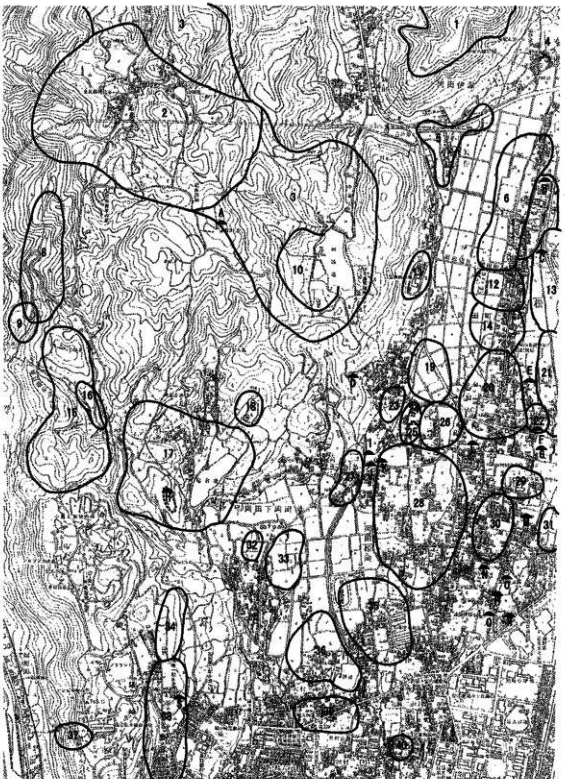
調査団長：竹澤公章（松本市教育長）

調査担当者：菊池保夫、和田和哉、山本紀之、太田圭郁、小山貴広

調査員：今村　克、森　義直

協力者：浅輪敬二、荒木　稔、石井脩二、石川光男、今井太成、入山正男、大月八十喜、
上條道代、久保田登子、小松正子、下条ちか子、清水陽子、田中一雄、兎川國明、
藤井道明、布山　洋、宮田美智子、百瀬二三子、百瀬義友、米山貞興、横山　清、
渡辺順子、中川佳子、中澤温子、竹平悦子、洞沢文江、村山牧枝、八板千佳

事務局：松本市教育委員会教育部文化財保護課
池田英俊（課長、平成16年４月～）、有賀一誠（課長、～平成16年３月）、熊谷康治（課長補佐）、
田口博敏（同、～平成16年３月）、川上百合子（係長、平成16年４月～）、直井雅尚（主査）、
久保田剛（主任、～平成16年３月）、小山高志（主任、平成16年４月～）、渡邊陽子（嘱託）、
太田万喜子（嘱託、～平成16年８月）、三村隆浩（嘱託、平成16年12月～平成17年３月）



・・・今回調査地

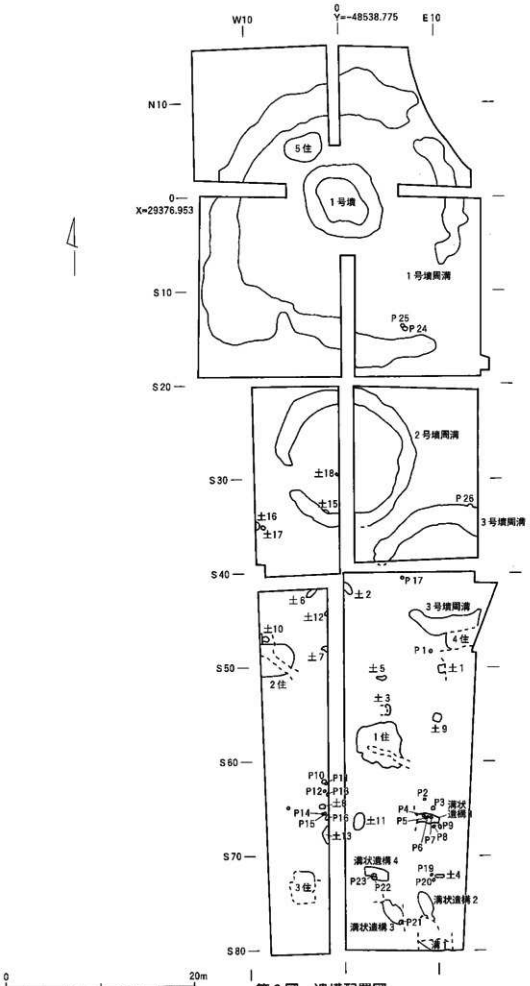
（遺跡など）

1 伊深城址
2 島内山田遺跡
3 北部古墳址群
4 小雪山城址
5 矢作遺跡
6 岡田町遺跡
7 舘渡し遺跡
8 平瀬川寛古墳址群
9 上ノ寺遺跡
10 田清遺跡
11 向山遺跡
12 二反田遺跡
13 原畑遺跡
14 下出口遺跡
15 御殿山城址
16 老根田古墳
17 塩倉池遺跡
18 御宝殿遺跡
19 岡田宮の前遺跡
20 岡田西裏遺跡
21 宮の上遺跡
22 下扇敷遺跡
23 岡田神社裏遺跡
24 岡田氏館址
25 岡田堀ノ内遺跡
26 岡田田中遺跡
27 天神ノ木遺跡
28 岡田松岡遺跡
29 杵坂遺跡
30 松岡七日市場遺跡
31 水汲西原遺跡
32 土田遺跡
33 笠原遺跡
34 神沢遺跡
35 トウコン原遺跡
36 狐塚遺跡
37 鳥屋山古墳
38 縫ノ平遺跡
39 旧射的場西遺跡
40 元原遺跡

（古墳）

A 芥子坊主山古墳
B 山城古墳
C 高根塚古墳
D 清水入り古墳
E 西原古墳
F 原下屋敷古墳
G 塚畑古墳
H 塚山古墳
I 矢崎１号古墳
J 矢崎２号古墳
K 矢崎３号古墳
L 岡田猫塚古墳
M 水汲５号古墳
N 松岡古墳
O 水汲４号古墳
P 水汲３号古墳
Q 水汲２号古墳
R 水汲１号古墳
S 縫ノ平１号古墳

第２図　周辺の遺跡


W10
0
Y=-48538.775
E10
N10
0
X=29376.953
S10
S20
S30
S40
S50
S60
S70
S80
5住
1号墳
1号墳周溝
P25
P24
2号墳周溝
±18
±15
P26
3号墳周溝
±16
±17
P17
±2
±6
±12
±10
±7
3号墳周溝
4住
P1
±1
2住
±5
±3
±9
1住
P10
P11
P12
P13
±6
P14
P15
P16
±11
±13
P2
P3
P4
P5
P9
P7
P8
P6
溝状遺構1
溝状遺構4
P19
P20
±4
P23
P22
3住
溝状遺構2
溝状遺構3
P21
溝1
0
20m

第３図　遺構配置図

第Ⅱ章　遺跡の環境

第Ⅰ節　塩倉池遺跡・塚山古墳の地形・地質

調査地の立地

塚山古墳は松本市岡田下岡田地区にあり、旧松本市街地から岡田地区の西に細く尾根状に延びる標高710～715mの山地上にある。この山地の西側は松本盆地が広がり、奈良井川、梓川を越えて15km程で西山の中古成層からなる飛騨山地に至る。東側は岡田地区から旧松本市街地に続く女鳥羽川扇状地が広がり、3～4kmで美ヶ原から続く第三紀層の筑摩山地となっている。

塚山古墳のある細長い山地は、北から標高891.5mの芥子望主山～743mの鳥居山～670mの城山公園と延びており、南に行くほど標高を減じている。西側は急峻な断層崖で東側は緩やかな傾動山地となっている。本古墳は芥子望主山と鳥居山の中間で東斜面の南北に長い瘤状の高地にあり東側の眺望は絶景である。

周辺の地形・地質

本調査地を含む広大な松本盆地は、洪積世中期頃から継続して起きた造盆地運動の結果誕生した構造性の盆地で、糸魚川～静岡構造線とほぼ平行な東・西の山麓線沿いの大断層と、それを横切る東西方向の断層により生じた南北に長い盆地であり、西と南は飛騨山地の中古生層とそれに貫入した火成岩類よりなっている。東部から東北部1,000～2,000mのほぼ南北に連なる筑摩山地で、新第三紀層とそれに貫入や噴出した火成岩類よりなっている。

調査地に関係のある盆地の南半分を占める主な堆積物は、南西方向から盆地に流入する梓川水系のものであり、更に南から流入する鎖川・奈良井川・田川の堆積物が加わって複合扇状地を形成し、緩く東北東に傾斜している。

なお梓川系の砂礫層の東端は、清水付近まで到達していることがボーリング調査の結果判明している。

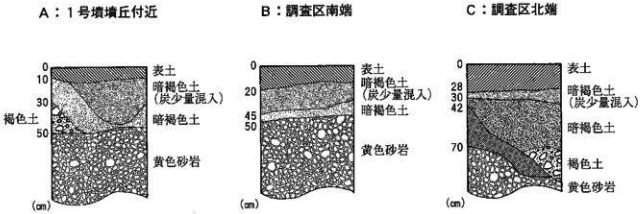
一旦盆地が形成されて後、洪積世後期後半頃から旧松本市街地付近に局部的な構造性の盆地の形成が始まり、同時にその西は逆に傾動しながら隆起を始め、それまで大口沢方面に西流していた古女鳥羽川は、次第に南に流れを変え、河床の砂礫を第三紀層の上に堆積させ更に隆起の進行により、流路が東に押しやられる頃、乗鞍火山灰のロームが河川堆積物を覆うに到った。尾根状に隆起した山地は、西側は立地のところで述べた如く、急峻な断層崖で東側は緩やかな斜面となっており、この斜面に三段の段丘面を形成しつつ岡田町の西側～松本市街地の西側を旧女鳥羽川は流れていた。（一部の支流は東側の大村方面に流れていたと推定される。）女鳥羽川が現在のようになるのは平安時代の大洪水以後のことである。

本塚山古墳を論ずる上で女鳥羽川の変遷が特に重要であるので、その歴史を概観したが、現状は三才山峠(1500m)付近を源流とし幾つもの沢を合して西流している。ここまでは古女鳥羽川と同じであるが、稲倉付近で120°向きを変え市街地に向かって南流し流路の首振りにより貝殻を伏せたような地形、即ち扇状地を形成している。現在の流路は上述した如く扇状地の東端を流れるに到った。

塚山古墳付近の地形・地質

発掘地点付近の東に緩く傾斜した南北方向の尾根筋には、アメーバ状の起伏に富む地形がみられ、その一つ、南北方向に約250m程の瘤状の高地上に北から１号、２号、３号と３つの古墳が造営され、北の１号墳付近が標高715mで一番高く南の３号墳付近が710m程である。基盤は新第三紀の内村層で１号墳付近は砂質泥岩であり、地層の走向はN10°～20°Wで傾斜は45°NEである。２号・３号墳付近は火成岩の輝石安山岩が基盤となっている。そしてそれらの上には古女鳥羽川の河床礫は殆どなくロームが載っている。ロームの堆積時期には幅があるため、下部のものは流水の作用を受け基盤の風化した角礫が混入しており、移動堆積したことを示しているが上部ほど混入物のないロームになっている。最上部は腐植物の混入により、いわゆる黒ボカ土である。調査地点のローム層の厚さは、基盤の表面の凹凸が激しく、更にその後何回か人工的に削られたり盛土されたりしたため正確にはわからないが、数十cmから150cmまで変化している。

発掘地点付近の複雑な地形の原因は前述した如く、傾動しながら隆起し、古女鳥羽川の流路が西から南に変わって発掘地点付近を流れたとき、第三紀層にも硬軟の差があり、それを貫く輝石安山岩は硬いため侵食の難易により複雑な流路を取りながら、ゆっくり東へ押しやられた結果であるとみられる。古墳の立地としては、東側への緩斜面で古女鳥羽川に削り残された瘤状の高地にあるため、西側は尾根筋に遮られているが東側の岡田から旧松本市街地方面の眺望は極めて良く、当時の人々もそのことを先ず念頭に置いて造営したものとみられる。



挿図１　調査地土層概念図

第Ⅱ節　歴史的環境

今回発掘調査を行った塩倉池遺跡、塚山古墳群の周辺に分布する岡田地区の遺跡について、過去に行なわれた調査等から時代ごとに概観してみたい。

旧石器時代

伊深怒田原から神子柴型石斧、岡田神社西北の東斜面から有舌尖頭器が採集されている。ともに旧石器時代最終末（約1万3千年前）の遺物とされている。

縄文時代

平成2年に松本市教育委員会（以下市教委）が行った調査で、矢作遺跡から早期の土器片が出土している。堂田遺跡からは平成5年の市教委の調査で、市内2例目となる前期の竪穴住居址1軒が確認されている。中期になると各地から遺物が発見されており、塩辛遺跡では平成2～3年の調査で19軒の住居址と多数の土器・石器が出土している。矢作遺跡でも前述の調査で住居址7軒が確認され、同じく多数の土器・石器が出土している。

弥生時代

この時代の遺跡はほとんどなく、平成3年の市教委の調査で岡田町遺跡から中期の土器が2点出土しているのみである。

古墳時代

岡田地区には湮滅したものも含めて20基前後の古墳があったとされる。これらは大きく2つのグループに分けられる。1つは城山丘陵へ続く北縁の丘陵麓地帯のグループ、もう1つは岡田から本郷地区の水没に至る女鳥羽川右岸段丘上のグループである。塚山古墳群は前者に属している。（文献1）

古墳時代の集落遺跡としては塩辛遺跡、岡田町遺跡、二反田遺跡がある。塩辛遺跡では住居址1軒と掘立柱建物址4棟が確認されている。岡田町遺跡、二反田遺跡では、平成3年と平成5年の市教委の調査によって住居址10軒が確認されている。

奈良・平安時代

この時代の遺跡としては、塩辛遺跡、岡田町遺跡、二反田遺跡、岡田西裏遺跡、宮の前遺跡、トウコン原遺跡などが知られている。塩辛遺跡では住居址18軒と掘立柱建物址9棟、岡田町遺跡では住居址99軒と掘立柱建物址21棟、二反田遺跡では住居址1軒、昭和54年から7回にわたり調査した岡田西裏遺跡では住居址58軒、平成2年に調査した宮の前遺跡では住居址31軒と掘立柱建物址5棟、平成2年から3年にかけて調査したトウコン原遺跡では掘立柱建物址6棟がそれぞれ確認されている。中でも宮の前遺跡では1辺が7m以上の大型掘立柱建物址が3棟確認されており注目される。また岡田町遺跡、宮の前遺跡からは瓦片や円面硯などの特殊な遺物が出土している。

この時代の代表的な土器は土師器と須恵器である。このうち土師器は岡田町遺跡、岡田宮の前遺跡などで確認された土師器焼成坑を用いて集落の中で作られていたと考えられる。一方の須恵器は田溝池周辺から島内地区の山田まで広がる北部古窯址群が生産地の一つとして知られている。

中世

岡田地区では中世の遺構・遺物の発見は数少ない。矢作遺跡で土坑から銭貨や焼骨片が、二反田遺跡で掘立柱建物址1棟が、岡田町遺跡で竪穴状遺構や火葬墓と少量の銭貨が確認されているくらいである。

第Ⅲ節　過去の調査の概要

塩倉池遺跡

塩倉池遺跡は旧石器時代から平安時代までの長期間にわたる遺構・遺物の発見が報告されている。

塩倉池の北側と西側に広がる丘陵の斜面からは小型の掻器、尖頭状石器が採集されている。これらは旧石器時代の遺物とされているが、これについては異論が出されており不明な点が多い。（文献２）

本遺跡から出土する遺物の中心は、縄文時代中期から後期後半のものである。遺物発見の歴史は古く大正８年(1919) に刊行された『東筑摩郡誌』(文献３）に、外面に模様がある土器の破片・雷斧・石鏃などが出土したとの記述がある。さらに昭和８年(1933) 刊行の『松本市史　上巻』文献４には滑車形石環と円形四孔土盤が発見されたとの記述がある。滑車形石環は他の縄文系の遺物とともに地下約１ｍの深さから出土したという。材質は粘板岩で外径１寸５分（約４.５㎝)、穴の内径９分９厘（約２.９㎝）で、外周には溝が刻まれていた。一方の円形四孔土盤の詳しい発見状況は不明だが、直径は最大部分で２寸７分（約６.２㎝)、厚さは最大で２分（約０.６㎝）の扁平な円盤で、４つの穴があけられている。両者ともに同書に図面が掲載されているが残念ながら遺物の所在は不明である。

本遺跡の縄文時代の遺物としてはほかに、塩倉池の西側からは加曽利Ｅ式土器・堀之内式土器・土偶・打製石斧・凹石などが、南側からは勝坂式土器・打製石斧が、東側からは加曽利Ｅ式土器・打製石斧などが出土している。この他にも塩倉池の北西にあたる小字塚峰で縄文時代の土器・土偶・石器、平安時代の土師器・須恵器が出土している。

塩倉池遺跡で市教委によって過去３回にわたり発掘調査が行われ、遺構・遺物が発見されている。

第１次調査

発掘調査はりんごの木の植え替えに伴うもので、平成７年12月９日から12月23日まで行われた。対象面積は20㎡と狭隘だったが、縄文時代の敷石住居址１軒と土坑１基が確認された。遺物は後期堀之内式と思われる粗窯と炉胎土器を含む土器、石棒片・凹石・石斧片・磨石などの石製品が確認された。

第２次調査

発掘調査は市道1054号線拡幅工事に伴って、平成10年10月７日から10月19日にかけて実施された。拡幅工事中に法面から遺構及び遺物が発見されたため、法面観察中心の調査となり、面的調査は８㎡にとどまった。遺構は面的調査で土坑２基、断面調査で竪穴住居址１軒と土坑５基が確認された。これらは縄文時代中期と考えられる。またこの調査では古墳時代の竪穴住居址２軒が確認された。遺物は縄文時代の土器・石器、古墳時代の土器が出土している。

第３次調査

アルプス公園の拡張工事に伴い、今回の調査地の道路を挟んだ向かい側の尾根について、平成13年６月28日から７月13日にかけて行なわれた。前年に行なった試掘に基づいてトレンチを設定し、66㎡にわたって調査を行った。遺構は縄文時代と思われる土坑２基が確認されたのみである。遺物も少量の縄文土器と須恵器片が１点出土したのみであった。

塚山古墳群

塩倉池西側の土田山丘陵の頂上に塚山古墳群は築かれている。近くには松本市から安曇平へ通じる道の１つである古道養老板が通っている。土田山は景勝の地で墳丘の上に立つと岡田地区の水田地帯はもちろん松本市街地まで一望することができる。

１号墳は元来主体部はあまり破壊されていないといわれていたが、築造以来徐々に周囲から削平されてき

たようである。そのため調査前は径7m、高さ1m余りの小さな墳丘が残されているにすぎなかった。（文献5）

記録に残るところでは大正年間に墳丘を破壊したことが知られている。この時は「鉄剣1、勾玉2、管玉2、鉄鏃3」（文献6）が出土している。長野県史（文献7）によると、出土品は「鉄剣1、鉄鏃10、勾玉2、管玉2」とされている。この時の調査では土師器や須恵器の出土はなかったようである。埋葬施設は無石室で底部は一面粘土床で木炭があったといわれている。地元の方の話によると、この時に祟りを恐れて一度壊した墳丘の土を再び積み上げて、神主を呼んでお祓いをしたとのことである。

この時に出土した鉄剣、勾玉、管玉の実測図が（文献6）に掲載されている。これによると鉄剣は全長約54cm、茎の長さは関部から約9.6cmある。剣身の幅はほぼ均一で約2.8cm、身の断面はレンズ状を呈している。全体の形状は長さに較べて幅が狭い形式的には新しいものだとされている。勾玉は長さ約3cmで幅約1.2cm、腹側がC字型を呈している。管玉は全長約2cm、直径約1cmのものが1点である。残念ながらこれらの出土品の所在地は現在不明である。

調査前の塚山古墳群は1号墳のみが残されていたが、かつては南側にもう2基古墳が存在していたことが以前から知られていた。この2基は明治15年（1882）頃に発掘され刀が2本出土したとされている（文献8）。2基ともこの発掘で墳丘部分が完全に破壊されてしまい、出土した刀の行方も判然としない。

第Ⅲ章　調査結果

第Ⅰ節 調査の概要

1．調査地

今回の調査地は松本市大字岡田下岡田の塩倉池西側に位置する土田山丘陵であり、現況は頂上平坦部分の北半分が畑と荒地、南半分がりんご園である。東側斜面はりんご園で西側斜面は作物の作付けはない。塩倉池遺跡は前述のとおり現在までに3次にわたる調査が行なわれており、今回は第4次調査となる。調査対象は老人ホームの敷地面積10,000㎡であるが、調査期間の制約から1号墳を中心に丘陵の頂上平坦部分約2,335㎡について調査を実施した。調査は1号墳のほぼ中心を座標原点（NS0，EW0）として3mグリットを任意に設定し、遺構の測量作業を行なった。グリット軸は任意での設定のため真北より8°19′00″のずれが生じている。調査区の基準国家座標値は座標原点でX＝29376.953　Y＝－48538.775である。

2．調査方法

今回の調査は特別養護老人ホーム「浅間つつじ荘」の移転改築に伴い破壊されてしまう塚山古墳群の記録保存を主たる目的とした。そのためまず現存していた1号墳墳丘を中心にトレンチを設定し土層断面の観察と遺構範囲の確認を行った。次にトレンチを基準に1号墳周辺を1～4区、2号墳周辺を5～6区として調査区を設定した。各調査区は重機によって表土及び耕作土を除去したのち遺構検出を行なった。1号墳墳丘は土層断面を観察したところ主体部は確認されず、攪乱も激しかったため記録した後地山層まで掘削し、堆積及び盛土層の確認を行なった。各古墳の周溝は土層観察用のベルトを数ヶ所残して掘り下げを行なった。

一方3号墳南部に広がる平坦面は1～6区の調査区を基準にトレンチを設定し、遺構の有無を確認した後トレンチを中心に7・8区の調査区を設定して調査を行なった。調査は1～6区同様表土を重機によって除去し、遺構の検出を試みた。

また、1～8区まで全ての遺構を記録した後、ラジコンヘリコプターにより上空から全景写真を撮影して調査を終了した。

第Ⅱ節　遺構

1．古墳

塚山1号墳（第4図）

調査区北端1区から4区に位置する。塚山古墳群では墳丘が唯一残されていた古墳である。墳丘は東西6.5m、南北7mのゆがんだ円形をしており、これまでの開墾・開発で破壊されたためか、40から50度の傾斜をもつ斜面となっている。墳丘の高さは現地表面から1.4m程度で、頂上は東西4.3m、南北4mのゆがんだ平行四辺形状の平坦面となっている。周溝の内縁を墳丘の裾部と想定すると、東西南北ともに22mの規模をもつ円墳だったとみられる。周溝外縁まで含めればその大きさは東西28m、南北30mにも達する。松本市内では平田里1号墳に次いで2番目に大きい円墳となる。

周溝は内径約22m、外径約27mから32mの大きさで周囲を巡り、南東部と北東部でわずかに途切れている。そのため仮に1区～4区に広がるものを1号墳周溝A、東部に広がるものを1号墳周溝Bとした。周溝Aは幅約4mで巡り、南西部に張り出しのような広がりを持つ。また、南部は地山の礫層が露出しており幅が1mと極端に狭くなっている。これらは恐らく地山の掘り易い土を選定しながら掘った結果であろう。周溝Bは幅1mから2.5m、長さ13.5mで墳丘東部に位置する。南部に行くにしたがって地山が露出するようになる。周溝A・Bともに掘り込みは浅く、断面は非常にゆるやかなU字形を呈している。

墳丘は黒褐色の砂質泥岩層の上に版築して盛られている。墳丘周囲の砂質泥岩層は削り取られており、墳丘部分のみ残されていた。墳丘盛土層には地山であるロームの粒が少なからず含まれており、地山を削りこんで盛り上げた事を窺わせる。墳丘内に包含されるような形で第5号住居址がある。第5号住居址は墳丘築造時に北半を削り取られていた。これらのことから墳丘は地形を利用し、周溝及び周囲の土を削りながら盛っていったものと考えられる。

遺物は墳丘と周溝から出土している。墳丘からは縄文土器、土師器、勾玉が出土している。縄文土器や土師器は古墳築造時もしくは、後世の開墾などの際に混入したと考えられる。勾玉は墳丘内から出土しているが、その場所に意図して置いたかどうかは不明である。周溝からは多数の土師器と須恵器、石器、鉄器が出土している。土器は総じて摩滅が激しく小破片が多かった。土師器は周溝全体から出土しているが、周溝Aの南側から特にまとまって出土した。須恵器もやはり周溝Aの南東端で集中して出土している。土師器に比べ接合資料も多く良好な資料が得られたが、中でも特に樽型壺は飯田市物見塚古墳に次いで県内2例目の貴重な発見であった。石器は縄文時代と思われるものが多く混入していた。特に偏りはみられず、埋没過程で混入したのではないかと思われる。鉄器は周溝南西部から鉄鏃が出土したのみである。これらの遺物のほとんどが周溝底面から浮いた状態で出土しており、意図してその場所に置いたものではなく埋没する過程の中で混入したものと考えられる。このような遺物の出土状況から見て本址は古墳時代中期、5世紀代の築造と考えられる。

塚山2号墳（第6図）

5区6区にまたがり、1号墳の南に隣接する。墳丘、主体部は全く失われており、周溝のみを残していた。場所から判断して明治15年に発掘された古墳の一つであると考えられる。周溝はほぼ円形を呈し、南西部分に幅4mの開口部をもつ。周溝の内径約12m、外径約15mを測る円墳である。周溝の幅は約2mを測り、1号墳に比べて全体の幅が一定している。周溝は22～55cmと深くなっている。断面はU字形を呈し、全体として1号墳よりも掘り込みのはっきりした周溝である。

周溝からは土師器が数多く出土している。土師器は周溝の全域から出土しているが、多くは6区から出土している。器種は壺が多くそのほぼ全てが二重口縁を持つ。これらの壺はミガキがほとんど認められず、ハケのみで調整している。また、法量や器形が定量化しているため、被葬者のために特別に作られた可能性も考えられる。須恵器は周溝の南西部からしか出土していない。本址も1号墳と同様、出土土器から見て古墳時代中期、5世紀代の築造と考えられる。

塚山3号墳（第7図）

2号墳の南東に位置し、4住を切る。墳丘、主体部は失われており、周溝のみが検出された。本址も明治15年に発掘された古墳の一つであると考えるのが妥当であろう。1号墳、2号墳よりもやや東寄りに造られており、東側は農作業用の道路が通っているため調査できなかった。周溝は約3mの幅で巡り、内径約10m、外径約14mを測る。ほぼ円形を呈し、南西部分に幅6mの開口部をもつ。周溝断面はU字形を呈し、北半が深くなっている。これは近代の攪乱で周溝の南側が破壊されたためとも考えられる。この3号墳は開口部の位置や周溝の規模、その形状など2号墳と非常に類似している。

出土した遺物は少なく、僅かな量の土師器と須恵器、石器が出土したのみであった。石器は縄文時代のものと考えられ混入品と考えられる。須恵器は9世紀頃のもので、こちらも混入品と考えられる。

先ほど述べたとおり3号墳は2号墳と規模、形状ともにほとんど同一であることから両者の間には何らかの関連性がある可能性も否定できない。遺物が少ないため本址の時期ははっきりしないが、出土した土師器の時期などから判断して古墳時代中期、5世紀代の築造と考えられる。

2．竪穴住居址

第1号住居址（第8図）

8区中央で検出した。長軸5.3m、短軸4.7mを測る不整方形を呈している。主軸方向はN－3°－Wを示す。住居床面にはピットが5基確認でき、P1、P2は恐らく柱穴であろうと思われる。P5覆土には多量の炭・焼土が含まれており、底面も多少の硬化が見られたため地床炉であると考えられる。住居のほぼ中央に埋甕炉が1基発見されている。床面は礫が露出し、後世の攪乱も受けているため平坦ではなく、明確な床面も捉えることができなかった。壁はゆるやかに立ち上がり、一部深さ20cmを測るが、後世の耕作などで削られたと思われ、南東部分は壁がほとんど残っていない。本址の時期は、遺物から判断して縄文時代中期に属すると考える。

第2号住居址（第8図）

7区北部で検出した。長軸現存長3.3m、短軸3.4mの不整円形を呈すると考えられる。主軸方向は不明である。後世の攪乱を受けてはいるが攪乱下に床面がみられ、一部壁面の立ち上がりも捉えられたため住居とした。しかしながら住居の大部分は攪乱によって破壊されてしまっていたため柱穴や炉などは確認することができなかった。また床面の北東部分は地山の礫が露出している。出土遺物が少なかったため帰属時期は判断し難いが恐らく縄文中期に比定されるであろう。

第３号住居址（第９図）

７区中央部で検出した。住居の３／４が攪乱により破壊されており、規模はつかむことができなかった。主軸はＮ－40°－Ｅであろう。住居内部からは５つのピットが確認でき、その内Ｐ1、Ｐ2、Ｐ4は柱穴であると思われる。中央部付近には埋甕炉が見られるが、炉胎土器の摩滅が激しく取り上げることができなかった。埋甕炉以外の遺物が少なく帰属時期は不明であるが、恐らく縄文時代中期に属するであろう。

第４号住居址（第９図）

８区北で検出した。３号墳周溝に切られる。周囲を攪乱に切られ、住居プランはつかめなかったが埋甕炉が出土したため住居としたものである。炉胎土器は摩滅が激しく、図化することはできなかった。床面が捉えられなかったが、土層からみて恐らく埋甕炉のある位置が住居床面となるであろう。

遺物は縄文土器を中心に石器などが出土している。遺物からみて縄文時代中期に帰属するであろうと思われる。

第５号住居址（第10図）

１区南東で検出した。１号墳墳丘内にあり周溝に北半を切られている。長軸4.2m、短軸現存長2.9mの不整円形であり、主軸はＮ－71°－Ｗを示す。計８基のピットが検出された。内Ｐ4、Ｐ7、Ｐ8は柱穴であるが、残るＰ1、Ｐ2、Ｐ3、Ｐ5、Ｐ6も柱穴である可能性が高い。中央やや南西寄りには埋甕炉が２基検出された。埋甕炉２が埋甕炉１を切る形で設置されているため埋甕炉２のほうが新しいと思われる。炉胎土器は埋甕炉２のもののみ図化した。

住居床面やや上の覆土中からは多量の炭・焼土が出土した。これらの炭はある程度まとまりを持ってはいるが炭化木材などではなく、小さな炭化物が集合したものである。また、焼土も多量に認められるが覆土中にも床面にも比熱した痕跡がみられないことからいわゆる焼失住居ではなく埋没過程中に炭や焼土が廃棄されたものと判断できる。なおこの炭化物を用いて年代測定を行なった。

3．土坑（第11図）

今回の調査では18基の土坑を検出した。これらは１～６区で４基、７～８区で14基と調査区南方に多く分布している。このうち時期が判別できるものは遺物の出土がみられる３基のみだった。ここではこの３基について述べていく。

第16号土坑

５区で検出した。西半分は調査区外で調査できなかった。長軸90㎝、短軸47㎝、深さ30㎝を測る。覆土からは縄文時代中期の土器が出土している。用途は不明である。

第17号土坑

５区で検出した。撹乱に切られる。径46㎝、深さ26㎝を測る。遺物は縄文土器が出土している。擂鉢状の形を呈するが用途などは不明である。

第18号土坑

５区で検出した。他遺構との切り合い関係はない。規模は長軸54㎝、短軸40㎝、深さ36㎝を測る。遺物は縄文土器と石器が多量に出土している。遺物から判断して縄文時代に属すると考えられる。

4．ピット

今回の調査では25基のピットを検出した。しかしながら遺物を伴うものはなく、用途や時期の判明するものは一つもなかった。

5．溝址・溝状遺構（第12図）

今回の調査では溝址を１基、溝状遺構を４基検出した。全てが８区から出土している。遺物を伴うものはなく帰属時期を特定することは難しいが、８区南半にまとまっていることから古墳の周溝であった可能性も考えられる。

第１号溝址

８区で検出した。調査できた部分で最大幅1.1m、長さ3.8m、深さ50㎝を測るが、南以外の三方向を撹乱で切られ、南は調査区外のため、全体像を窺い知ることができない。検出状況から判断すると南東から北西に伸びていたと考えられる。

第１号溝状遺構

８区で検出した。P4、P5、P6と撹乱に切られる。現存長2.2mだが撹乱に切られているため、本来はさらに長かったと考えられる。幅は60㎝から90㎝とほぼ一定で、深さ28㎝を測る。壁は急に立ち上がり、断面は長方形を呈する。遺物が出土していないため本址の時期及び用途は不明である。

第2号溝状遺構

8区で検出した。長さ3.5mを測るが、本来は攪乱に切られている南側に伸びていたと考えられる。幅は40cmから1.4mとばらつきがある。深さは66cmと溝址・溝状遺構の中では最も深く、断面はV字形を呈する。

第3号溝状遺構

8区で検出した。P21と攪乱に切られる。幅は40cmから1.6mとばらつきがある。長さ3.1mを測るが本来は南北にさらに伸びていたと考えられる。深さは30cm前後でほぼ一定している。壁は急に立ち上がり、断面は皿形を呈する。本址は溝1の北西延長線上に存在しているため何らかの関連性も考えられる。

第4号溝状遺構

8区で検出した。P22、P23に切られる。長さは2.7m測るが、本址も西側を攪乱に切られており、本来はもっと伸びていた可能性がある。幅は70cmから1.3mを測るが、多くは1.2m前後で一定している。深さは46cmを測る。壁は急に立ち上がり、断面はバケツ形を呈する。遺物が出土していないため本址の時期及び用途は不明である。

第1表　竪穴住居址一覧表

No	区	形状	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	主軸方向	炉の形態	時期	備考
1	8	不整方形	530	473	20	N−3°−W	埋甕炉 地床炉	縄文中期	南東部を撹乱に切られる
2	7	不整円形	(330)	342	32			縄文中期	撹乱に切られ1/4のみ残存
3	7				37	N−40°−E	埋甕炉	縄文中期	撹乱に切られ1/4のみ残存
4	8				5		埋甕炉	縄文中期	北部を3号墳周溝、南部を撹乱に切られる
5	1	不整円形	425	(297)	12	N−71°−W	埋甕炉	縄文中期	北部を1号墳周溝に切られる

第2表　土坑一覧表

No	区	形状	規模(cm) 長軸	短軸	深さ	時期	備考
1	8	方形	74	(70)	6	不明	
2	8	楕円形	(120)	76	18	不明	西部調査区外
3	8	楕円形	118	(36)	34	不明	西部撹乱に切られる
4	8	長方形	240	180	23	不明	
5	8	楕円形	106	48	−	不明	北部撹乱に切られる
6	7	楕円形	(130)	(56)	18	不明	北部調査区外
7	7	楕円形	(84)	(52)	8	不明	東部調査区外
8	7	円形	66	56	6	不明	
9	8	方形	92	84	32	不明	北西部撹乱に切られる
10	7	楕円形	(86)	52	12	不明	西部撹乱に切られる
11	8	楕円形	176	108	53	不明	
12	7	楕円形	(36)	42	6	不明	東部調査区外
13	7	楕円形	190	(72)	20	不明	東部調査区外
14	−	−	−	−	−	−	欠番
15	5	不明	(52)	(27)	8	不明	南部2号墳周溝に切られる
16	5	不明	(90)	(47)	30	縄文中期	西部調査区外
17	5	円形	46	46	26	縄文中期	
18	5	楕円形	54	40	36	縄文中期	東部調査区外

第3表　ピット一覧表

No	区	形状	規模(cm)			時期	備考
			長軸	短軸	深さ		
1	8	円形	28	21	9	不明	
2	8	楕円形	31	20	19	不明	
3	8	円形	40	32	10	不明	
4	8	円形	29	22	12	不明	溝状1を切る
5	8	円形	20	19	9	不明	溝状1を切る
6	8	円形	20	18	11	不明	溝状1を切る
7	8	円形	26	20	11	不明	
8	8	楕円形	42	29	11	不明	
9	8	三角形	39	24	9	不明	北部攪乱
10	7	楕円形	50	36	14	不明	P11を切る
11	7	楕円形	26	20	8	不明	P10に切られる
12	7	円形	22	20	6	不明	
13	7	円形	34	(20)	6	不明	東部調査区外
14	7	—	—	—	—	不明	
15	7	円形	31	29	18	不明	
16	7	楕円形	50	39	12	不明	東部調査区外
17	8	不明				不明	
18	7	円形	30	29	30	不明	
19	8	円形	24	22	9	不明	
20	8	楕円形	34	20	11	不明	
21	—	—	—	—	—	不明	欠番
22	8	不整円形	50	(30)	21	不明	溝状4を切り、P23に切られる
23	8	円形	49	40	10	不明	溝状4、P22を切る
24	8	楕円形	49	42	12	不明	P25を切る
25	8	円形	38	34	8	不明	P24に切られる

第4表　溝・溝状遺構一覧表

No	区	断面形	規模(cm)			時期	備考
			長さ	幅	深さ		
溝1	8	逆台形	380	110	50	不明	北、東、西側攪乱　南部調査区外
溝状1	8	長方形	220	60	28	不明	P4、P5、P6に切られる西部攪乱
溝状2	8	V字形	350	40	66	不明	西部攪乱
溝状3	8	皿形	330	40	30	不明	P21に切られる　北西部攪乱
溝状4	8	長方形	270	70	46	不明	P22、P23に切られる

第Ⅲ節　遺物

1．土器（第13図～第16図）

今回の調査では古墳周溝や住居址を中心に縄文土器、須恵器、土師器等多数の遺物が出土した。しかしながら接合資料は少なく、摩滅も激しかったため図化できたものは26点に留まった。ここではそれらの様相について述べていく。

（1）縄文土器（第16図22～26）

主に竪穴住居址から出土している。深鉢、浅鉢、小型深鉢などが出土しているがほとんどが小片であり、接合できたものは図化した5点のみである。

16図25・26は深鉢である。ともに第5号住居址から出土した。25は胴部径29cmを測り、ほぼ直に立ち上がる深鉢である。内外面ともに激しく摩滅しており文様構成、帰属時期等は不明である。26は5住埋甕炉2の炉胎土器である。口径27.8cmを測り、頸部でわずかに膨らむ深鉢。口唇部は隆帯による楕円区画が並んでいる。区画内は斜行する沈線で充填されている。頸部には横に沈線が引かれ、その上に刺突が施される。口縁部には渦状の突起が見られる。恐らく中期中葉期に該当する。

16図23・24は浅鉢と思われる。その内24は残存径から浅鉢としているが、内外面ともに摩滅によって器面が削られており器形は定かではない。23は口縁部に2本の三角押し引きが施される。口径は38.2cmで胴部付近はわずかに丸みを帯びている。

16図22は口径11.8cm底径8.1cmを測り、小型深鉢と思われる。口縁部には隆帯による楕円区画があり、区画右縁にはドーナツ状の突起が見られる。区画内は斜行する押し引きで充填されていると思われる。胴部以下は摩滅が激しく文様構成は不明であるが、恐らく新道式期に比定されるであろう。

（2）須恵器

甕（第13図1、第14図3）

1号墳から2点出土した。1は高さ47.4cm、口径27.6cmを測る肩の張った扁球形を呈しており、外面上半には自然釉が付着している。口縁部は外反し端部付近に突帯をもつ。外面は平行叩きにより調整され、内面には同心円状の当て具痕が残されている。口縁部内面は工具によりナデられた後指頭圧痕が施されている。古墳時代中期、5世紀に帰属すると判断される。3は口径20.0cmを測る甕である。口縁部は外反しており、口縁端部で広がっている。口縁部近くの外面に突帯を付す。外面はロクロナデ後平行叩きが施されており、内面には花弁状の当て具痕が一部残されている。内外面ともに自然釉が付着している。古墳時代中期のものと思われる。

高杯（第14図4）

1号墳から1点出土した。脚部は完全に欠損しているが杯部はほぼ完全に復元された無蓋高坏である。現存高約6cm、口径14.8cmである。外面横位に2条の突帯を巡らし、間を櫛描波状文で飾る。胴部中央には「う」の字状の把手が付けられている。また、多少のズレがあるものの対角に同様の把手がつけられていた痕跡が窺える。杯部はロクロナデでの整形後一部回転ヘラ削りが施されており、自然釉が付着している。また、内面底部には釉溜りができている。古墳時代中期に比定されるであろう。

杯蓋（第14図9）

2号墳から1点ほぼ完形で出土した。口径13.3cm、器高3.3cmを測る。稜は鈍く突出し直下に沈線状の凹面を形成している。口縁部は端部内面に沈線が巡らされている。ロクロナデ整形後外面天井部には回転ヘラ

ケズリを施し、自然釉が天井部一面にかかっている。

甕（第14図５～８）

１号墳から３点（５・６・７）、２号墳から１点（８）出土した。６は唯一ほぼ完型品として出土した。器高9.2㎝、口径7.0㎝を測り、胴中央よりやや上に穿孔されている。孔はやや上向きに空けられており、内側には僅かにバリが出ている。口縁部は段を持ちつつ外反し、外面中ほどには突帯を巡らせている。底部はロクロナデ後指ナデされており、内面底部は棒状工具で突いて整形している。

５は約１／２が欠損しており、器高9.2㎝、口径7.0㎝を測る。孔は胴部中央付近に上向きに穿孔されており、内側にはバリが出ている。口縁端部はわずかに外反している。口縁部はやや膨らみつつ外反しており、中ほどに１条の突帯を設けている。突帯下には横位に櫛描波状文を巡らす。胴部には横位に２本の沈線が引かれ、その間に櫛描波状文を巡らしている。

７は口径9.8㎝の甕である。口縁部は外反して上がり、そのまま口縁端部を形成している。口縁部中ほどには１条の突帯が巡り、その直下に横位の櫛描波状文が施されている。ロクロナデ整形後底部に指ナデ調整がされる。胴部最大径付近にはわずかにカキ目が見られ、その後櫛歯状工具によって刺突が施されている。

８は２号墳出土のものである。口縁部の約１／２、胴部の約１／４を欠く。口縁端部が欠損しているため口径は不明である。口縁部は端部付近で外反し、下半には横位に櫛描波状文を巡らせている。胴部最大径付近には２本の突帯が巡っており、その間に横位の櫛歯波状文が施される。また、その突帯の間にやや上向きに孔が空けられており、内側には比較的大きなバリが見られる。内外面ともに自然釉が付着している。

これらの甕は総じて古墳時代中期、５世紀のものと考えられる。

樽形甕（第13図２）

１号墳から出土した。口縁部と胴部の約１／２を欠いている。残存高15.3㎝、胴部最大径16.8㎝を測り、胴部長軸は推定で21.6㎝である。口縁部は外反して上がり、屈折部やや上には突帯が巡らされている。胴部には縦位に３本の沈線を巡らし、その間に６本の縦位櫛描波状文が施されている。孔は胴部中央やや上に上向きで空けられており、内側には非常に大きなバリが出ている。側辺の円形部分はロクロナデ整形されており、円形部外側には突帯を巡らせている。外面胴部上半や口縁内部には自然釉が厚くかかっている。口縁接合部は縦のロクロナデ後、ヘラのような道具で穴を空けて口縁をはめ込んでいる。恐らく古墳時代中期のものと考えられる。

（３）土師器

高杯（第15図21）

１号墳からは小破片が37点、恐らく10個体前後、２号墳からは12点５個体前後出土した。その内図化できたものは21の１個体のみである。21は脚部上半の破片であるが摩滅が激しく、外面の調整は不明である。内面は工具によるナデ調整が行なわれている。ややふくらみを持つ形状で裾部から屈折して開いていくと思われる。

壷（第15図10～16）

１号墳からは破片が48点（21個体）、２号墳からは41点（29個体）出土している。図化できたものは10～16までの６個体であり、その全てが二重口縁壷である。

口径は14～16㎝のものがほとんどであるが、胴下半が残存しているものが少なく器高が判別できるものはなかった。13、16は口縁部が剥離している。外面は縦方向のハケ調整がされており、口縁はナデられているものが多い。内面にはハケ目が見られ、14、16は頸部に指頭圧痕が施されている。口縁部はやや内湾しながら開き、口縁端部でやや外反する。12は他のものと違い胴部が丸みを帯びている。口縁部も外反しな

がら広がっていく。外面はヘラ磨きにより調整されており、内面は工具ナデが施されている。

甕（第15図17～20）

口縁形は不明であるが恐らく甕と思われるものを４点図化した。17～20が該当する。いずれも底部のみの出土であるため壷、鉢である可能性も考えられる。底径は17、18が5.6cm、19、20が6.1cm前後となっている。外面はハケにより調整され、内面は工具によりナデられている。

このような破片が他に１号墳で８個体、２号墳で８個体出土している。

２．石器・鉄器（第17図）

石器（第17図27～39）

石器は主に１号墳周溝、竪穴住居址を中心に21点出土しているが図化できたものは12点のみである。ほとんどが縄文時代に帰属するが、27のみ古墳時代と思われる。27はメノウ製の勾玉であり、両面穿孔されている。１号墳墳丘内から出土しているため副葬品の一部である可能性が高い。30・31は石鏃である。30は５住から、31は３号墳周溝から出土している。31は有茎鏃であり、厚さ0.3cmの薄い石鏃である。38は軽石であるが表面に研磨された痕跡がみられる。意図的に擦ったものであろうが用途は不明である。39はメノウの石核である。割と良質のメノウであり何度も剥片を剥がした痕跡が見受けられる。

鉄器（第17図30）

鉄器は40の１点のみを図化した。１号墳周溝から出土した長さ9.0cm幅2.1cmの鉄鏃である。長三角形を呈しており、鏃身断面は平造りである。鏃身長は4.3cm、茎部長4.7cmであり、茎部が長くなっている。

第Ⅳ章 調査のまとめ

縄文時代

竪穴住居址5軒と土坑3基が出土している。竪穴住居址の内3軒は埋甕炉を伴っており、5住からは2基の埋甕炉が切りあって出土している。また5住は覆土中に多量の炭化物が含まれていた。このことから5住は少なくとも一度は建て替えが行なわれ、埋没過程中において炭や焼土の廃棄に利用されたことが考えられる。この集落は塩倉池遺跡で初めて調査確認された集落であり、同遺跡の研究の上で非常に貴重な発見と言える。

古墳時代

調査地は「塚山」とも呼ばれているように古墳がある場所として古くから知られていた。今回の調査で墳丘が残っていた1号墳の他に2基の古墳の場所を特定することができた。1号墳は予想していたよりもはるかに大きく、松本市内でも有数の大型円墳であることが判明した。埋葬施設は恐らく大正年間に破壊されたと考えられ、今回の調査では発見することができなかった。2号墳と3号墳は直径約10mと1号墳よりも小規模なものであった。それぞれの位置関係を見ると1号墳のほぼ真南に2号墳が存在している。また、2号墳と3号墳は規模や開口部の位置等で類似しており、それぞれの古墳で何らかの関連性があった可能性も考えられる。

周溝内からは多数の土師器と須恵器が出土している。1号墳からは多数の須恵器が出土しており、特に樽型瓶は飯田市物見塚古墳に次いで県内2例目の発見であり、貴重な発見となった。2号墳は土師器を中心として多数の土器が出土している。特に二重口縁の甕が多数出土しているが、これらのほとんどは法量等が類似しており、ミガキではなくハケ調整を施している点で一致している。このことからこれらの甕は2号墳被葬者のために特別に作られたという可能性も考えられ、今後の研究の上で非常に重要な出土状況を示しているといえるのではないだろうか。このような出土遺物から1～3号墳は総じて古墳時代中期、5世紀代の築造であるといえる。

最後に本調査にあたり多大なご理解とご協力をいただいた松塩筑木曽老人福祉施設組合、ならびに地元の塩倉町会の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

参考文献

文献1：松本市　1994『松本市史－第四巻 旧市町村編Ⅳ－』
文献2：松本市　1996『松本市史　第二巻 歴史編1』
文献3：信濃教育会東筑摩郡部会　1919『東筑摩郡誌』
文献4：松本市　1933『松本市史　上巻』
文献5：松本市　1994『松本市史－第四巻 旧市町村編Ⅳ－』
文献6：東筑摩郡 松本市・塩尻市郷土資料編纂会　1973『東筑摩郡 松本市・塩尻市誌　第二巻上』
文献7：長野県　1981『長野県史　考古資料編　全一巻（一）遺跡地名表』
文献8：松本市　1933『松本市史　上巻』

付　編

塩倉池遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

長野県松本市に所在する塩倉池遺跡では、発掘調査の結果、縄文時代中期と考えられる竪穴住居跡や古墳時代中期と考えられる円墳等が検出され、縄文土器や土師器、須恵器などの遺物が確認されている。

本報告では、古墳墳丘内より検出された竪穴住居より出土した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行い、遺構や遺物の年代に関わる資料を作成する。

1．試料

試料は、竪穴住居跡（5号住）より出土した炭化物2点（サンプル№1・2）である。なお、炭化物は、住居跡覆土中から多量出土しており、試料とした炭化物は、住居跡内南部（サンプル№1）及び東部（サンプル№2）から採取されたものである。なお、当遺構は、出土遺物から縄文時代中期中葉の年代観が想定されている。

2．分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、ＡＭＳ法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright1986－2002M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。なお、炭化材については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施する。

3．結果

結果を表1・2に示す。試料の測定年代（補正年代）は、4620～4500BPを示した。一方、暦年較正年代のうち、確からしさを示す相対比の大きい年代範囲に着目すると、サンプル№1は3337－3261calBC、サンプル№2は3500－3451calBCを示した。ところで、本地域では縄文土器型式と放射性炭素年代との対応関係（キーリ・武藤，1982；谷口，2001：小林・今村ほか，2003）の研究成果がある。このうち、小林・今

表1．放射性炭素年代測定および樹種同定結果

サンプル№	試　料　名	試料の質	樹種	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
1	塩倉池4 5住 №57	炭化材	クリ	4500±50	−27.13±0.94	4540±40	IAAA−41740
2	塩倉池4 5住 №31	炭化材	クリ	4620±40	−20.82±0.77	4550±40	IAAA−41741

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2．暦年較正結果

サンプル№	補正年代 BP	暦年較正年代(cal)			相対比	Code.No.
1	4500±45	cal BC 3337 − cal BC 3261	cal BP 5287 − 5211		0.410	IAAA−41740
		cal BC 3241 − cal BC 3208	cal BP 5191 − 5158		0.176	
		cal BC 3193 − cal BC 3151	cal BP 5143 − 5101		0.213	
		cal BC 3138 − cal BC 3101	cal BP 5088 − 5051		0.201	
2	4616±41	cal BC 3500 − cal BC 3451	cal BP 5450 − 5401		0.602	IAAA−41741
		cal BC 3443 − cal BC 3434	cal BP 5393 − 5384		0.064	
		cal BC 3378 − cal BC 3351	cal BP 5328 − 5301		0.334	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986−2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

村ほか（2003）によれば、縄文時代前期と中期の境が3550－3500calBC、縄文時代中期と後期の境が2500－2450calBCとされており、本分析結果で得られた年代は縄文時代中期に相当すると言える。

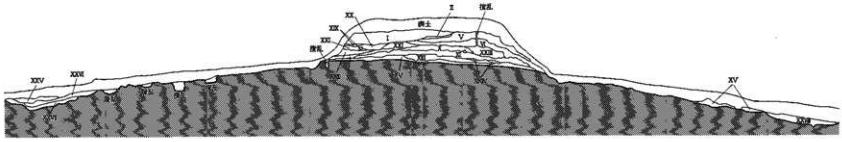
なお、炭化物の分析調査では、いずれもクリに同定されたが、出土状況等から用途等を検討することは言及できない。したがって、本分析結果については、炭化物と遺構との関連等を考慮し、慎重に扱う必要がある。

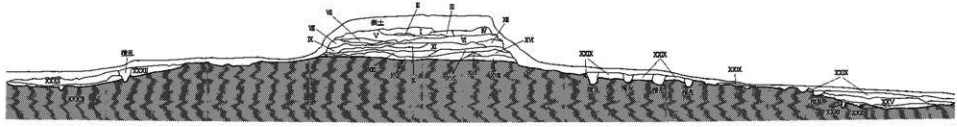
引用文献

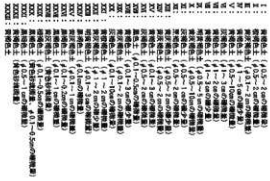
キーリ C.T.・武藤　康弘，1982，縄文時代の年代．縄文文化の研究１　縄文人とその環境，雄山閣，246－275.

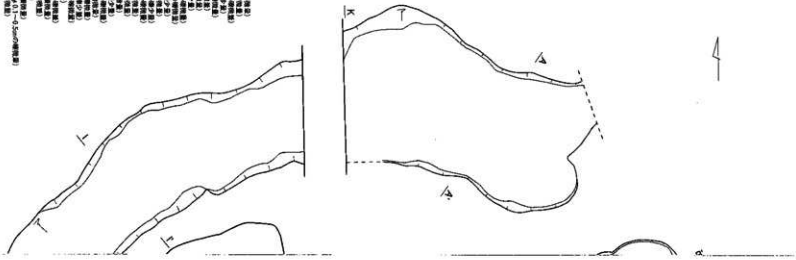
谷口康浩，2001，縄文時代遺跡の年代．季刊考古学，77,17-21.

小林謙一・今村峯雄・西本豊弘・坂本稔，2003，ＡＭＳ14Ｃ年代による縄紋土器計型式の変化の時間幅，炭素年代　測定と考古学　国立歴史民俗博物館研究業績集，国立歴史民俗博物館，127－130.

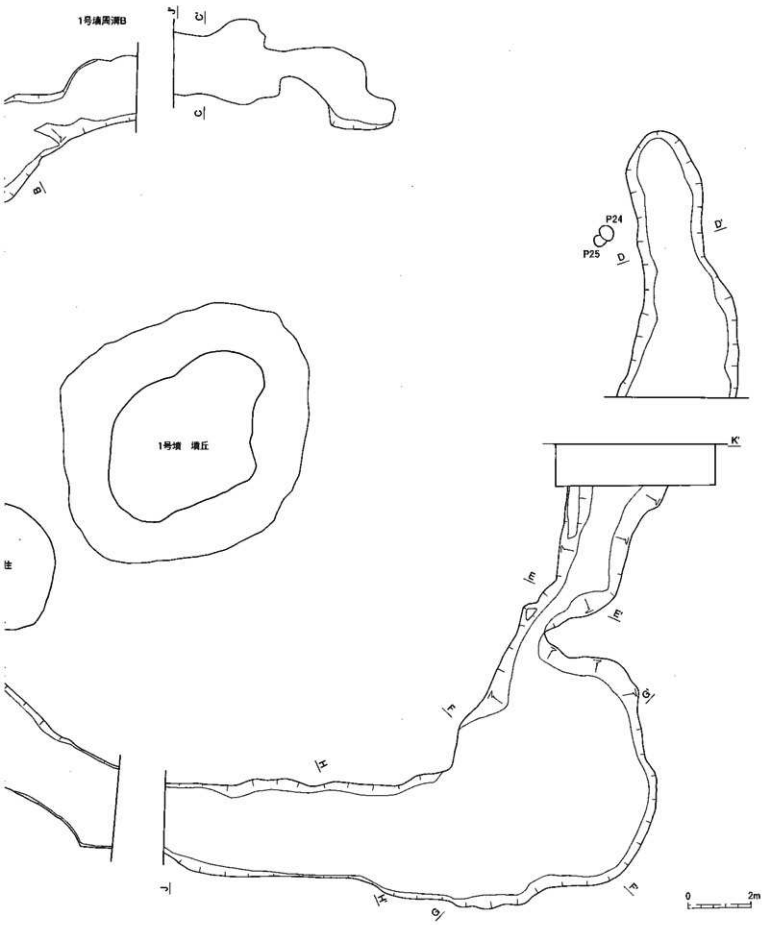




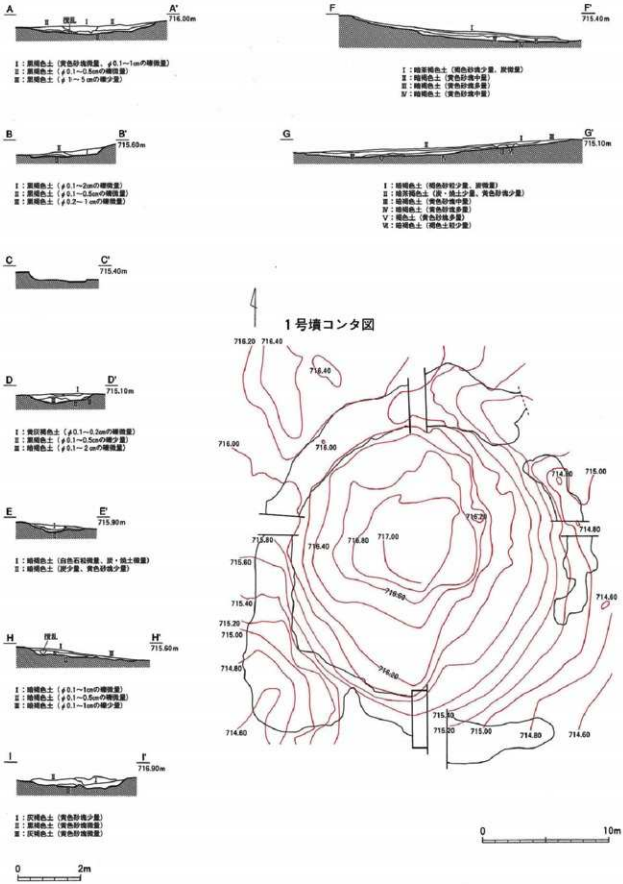




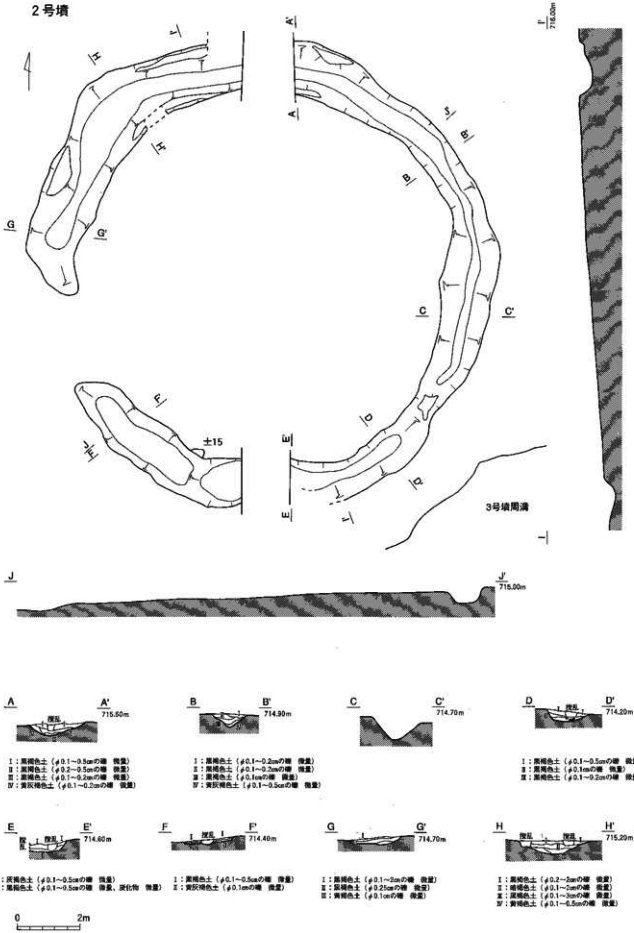
第4



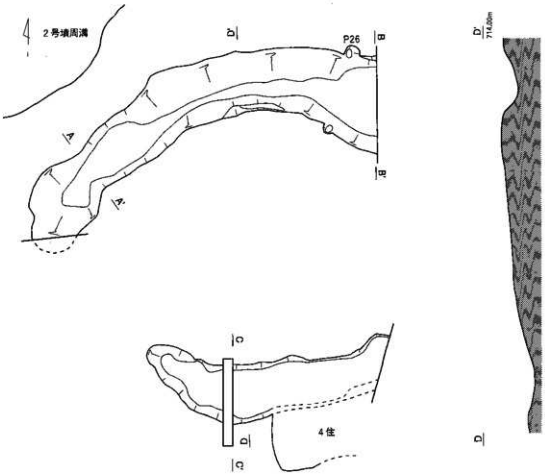
1号墳（1）

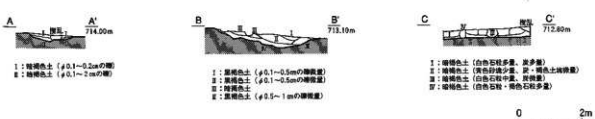

A
A'
716.00m
Ⅰ：黒褐色土（黄色砂塊微量，φ0.1～1cmの礫微量）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.1～0.5cmの礫微量）
Ⅲ：黒褐色土（φ1～5cmの礫少量）
B
B'
715.60m
Ⅰ：黒褐色土（φ0.1～2cmの礫微量）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.1～0.5cmの礫微量）
Ⅲ：黒褐色土（φ0.2～1cmの礫微量）
C
C'
715.40m
D
D'
715.10m
Ⅰ：褐灰褐色土（φ0.1～0.2mの礫微量）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.1～0.5cmの礫少量）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.1～2cmの礫微量）
E
E'
715.90m
Ⅰ：暗褐色土（白色石粒微量，炭・焼土微量）
Ⅱ：暗褐色土（炭少量、黄色砂塊少量）
H
H'
715.50m
Ⅰ：暗褐色土（φ0.1～1cmの礫微量）
Ⅱ：暗褐色土（φ0.1～0.5cmの礫微量）
Ⅲ：暗褐色土（φ0.1～1cmの礫少量）
I
I'
716.90m
Ⅰ：灰褐色土（黄色砂塊少量）
Ⅱ：黒褐色土（黄色砂塊微量）
Ⅲ：灰褐色土（黄色砂塊微量）
0
2m
F
F'
715.40m
Ⅰ：暗茶褐色土（褐色砂粒少量、炭微量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色砂塊少量）
Ⅲ：暗褐色土（黄色砂塊多量）
Ⅳ：暗褐色土（黄色砂塊中量）
G
G'
715.10m
Ⅰ：暗褐色土（褐色砂粒少量、炭微量）
Ⅱ：暗黒褐色土（炭・焼土少量、黄色砂塊少量）
Ⅲ：暗褐色土（黄色砂塊中量）
Ⅳ：暗褐色土（黄色砂塊多量）
Ⅴ：褐色土（黄色砂塊多量）
Ⅵ：暗褐色土（褐色土砂少量）
1号墳コンタ図
716.20
716.40
716.60
716.00
715.00
714.80
716.20
717.00
716.80
715.60
715.40
715.20
714.60
0
10m

第5図　1号墳（2）


2号墳
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
H
H'
J
J'
±15
3号墳周溝
715.50m
714.90m
714.70m
714.20m
714.60m
714.40m
714.70m
715.20m
715.00m
0
2m

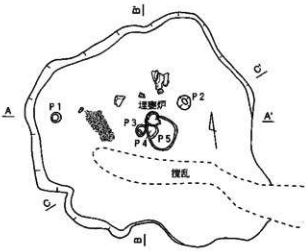
第6図　2号墳

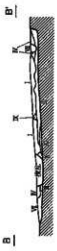

2号墳周溝
D'
714.00m
P26
B
B'
A
A'
C
C'
D
4住

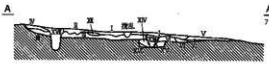

A
A'
714.00m
Ⅰ：暗褐色土（φ0.1～0.2mの礫）
Ⅱ：暗褐色土（φ0.1～2mの礫）
B
B'
713.10m
Ⅰ：黒褐色土（φ0.1～0.5mの礫含量）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.1～0.5mの礫含量）
Ⅲ：暗褐色土
Ⅳ：黒褐色土（φ0.5～1mの礫含量）
C
C'
712.80m
Ⅰ：暗褐色土（白色石粒多量、炭多量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色砂粒少量、炭・褐色土塊微量）
Ⅲ：暗褐色土（白色石粒中量、炭微量）
Ⅳ'：暗褐色土（白色石粒・褐色石粒多量）
0
2m

第７図　３号墳

第１号住居址

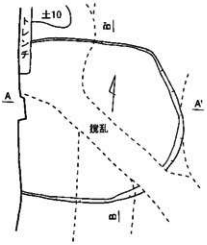






Ⅰ：暗褐色土（褐色石粒微量、炭・焼土中量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色砂微少量）
Ⅲ：暗褐色土（炭少量）
Ⅳ：暗褐色土（褐色石粒少量、炭・焼土少量）
Ⅴ：暗褐色土（黄色砂微少量）
Ⅵ：暗褐色土（炭・焼土粒微量）
Ⅶ：暗褐色土（φ1～4cmの礫多量）
Ⅷ：暗褐色土（黄色砂粒微量）
Ⅸ：暗褐色土（黄色砂微少量）
Ⅹ：暗褐色土（褐色石粒少量）
Ⅺ：褐色土（焼土量）
Ⅻ：褐色土（焼土多量）
XIII：黒褐色土（φ1～2cmの礫少量、炭・焼土中量）
XIV：暗褐色土（白色石粒・褐色石粒少量）
XV：暗褐色土（黄色砂微多量）
XVI：暗褐色土（褐色石粒少量）
XVII：暗褐色土（黄褐色土粒少量、炭・焼土微量）
XVIII：暗褐色土（黄色砂微少量、焼土微中量、炭少量）

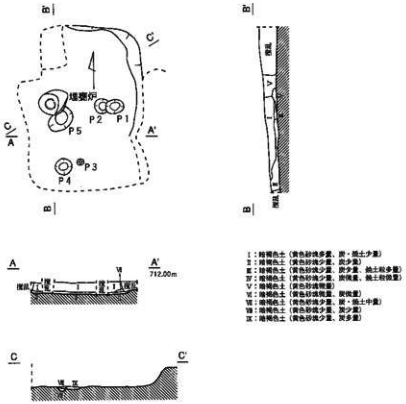
第２号住居址



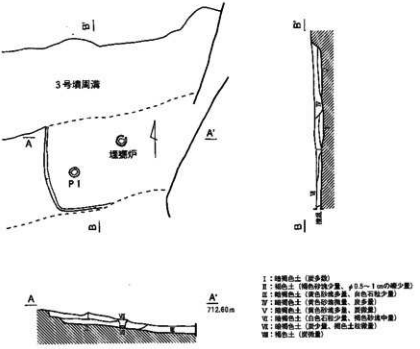
Ⅰ：暗褐色土（黄色砂微微量、炭・焼土少量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色砂微多量）
Ⅲ：暗褐色土（黄色砂微少量、炭・焼土微量）
Ⅳ：褐色土（黄色砂最多量）

第８図　住居址（１）

第３号住居址



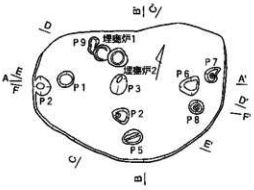
第４号住居址

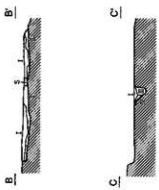


0　2m

第９図　住居址（２）

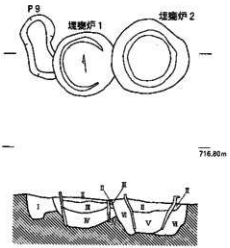
第５号住居址





Ⅰ：黒褐色土（φ0.1～2cmの礫微量、炭化物微量）
Ⅱ：灰黒褐色土（φ0.5～3cmの礫微量、炭化物微量）
Ⅲ：黒褐色土（炭化物微量）
Ⅳ：黄褐色土（φ0.1～0.5cmの礫微量、黄色砂質微量）

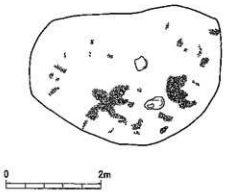
埋甕炉



Ⅰ：黒褐色土（φ0.1～1cmの礫微量、炭化物微量）
Ⅱ：黒褐色土（φ0.1～2cmの礫微量、炭化物微量）
Ⅲ：黄褐色土（φ0.1～1cmの礫少量）
Ⅳ：暗褐色土（φ0.1～0.5cmの礫微量）
Ⅴ：黄褐色土（φ0.1～1cmの礫微量、焼土粒微量）
Ⅵ：黄褐色土（φ0.1～0.5cmの礫微量）

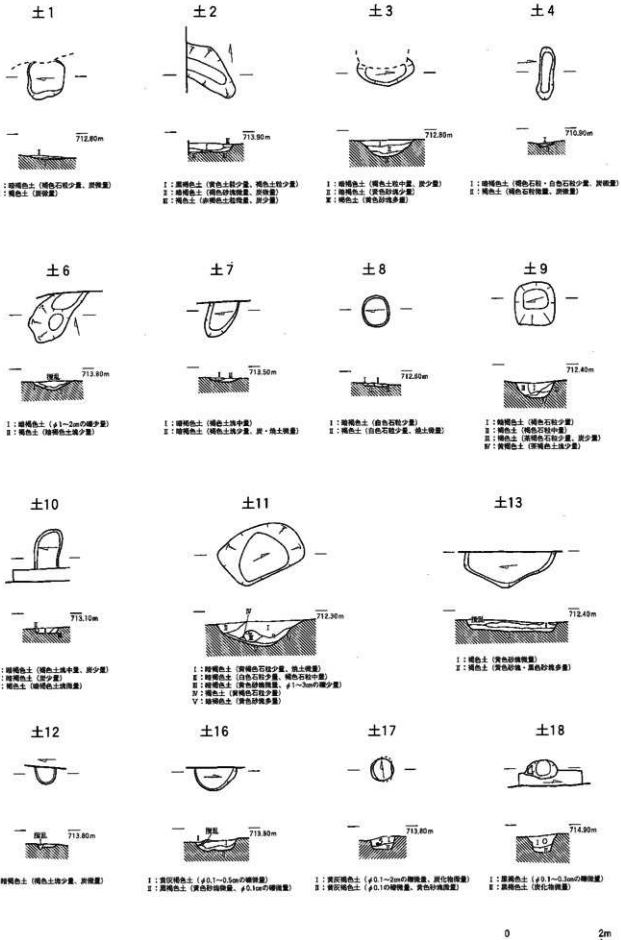
0　1m

第５号住居址　炭・焼土出土状況

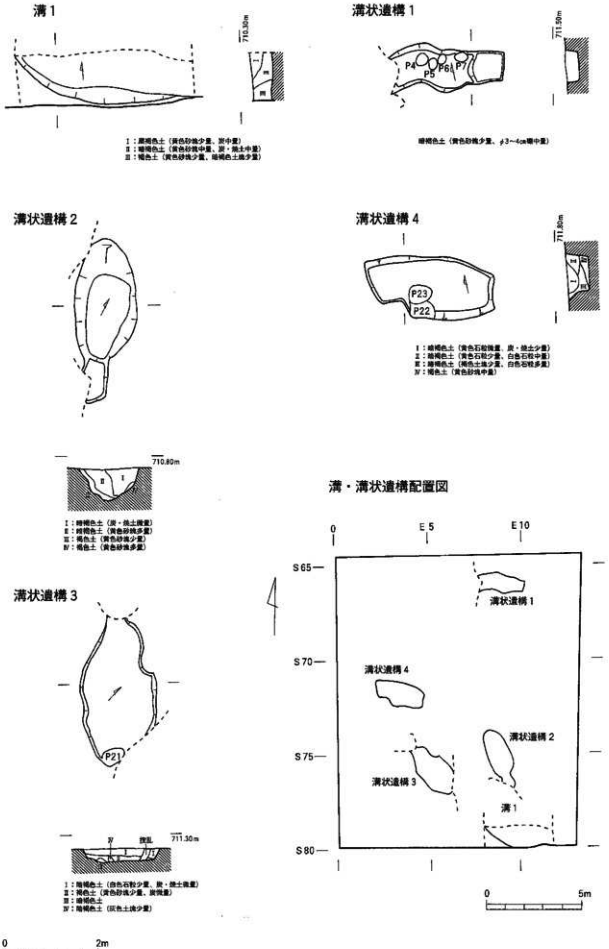


0　2m

第10図　住居址（３）

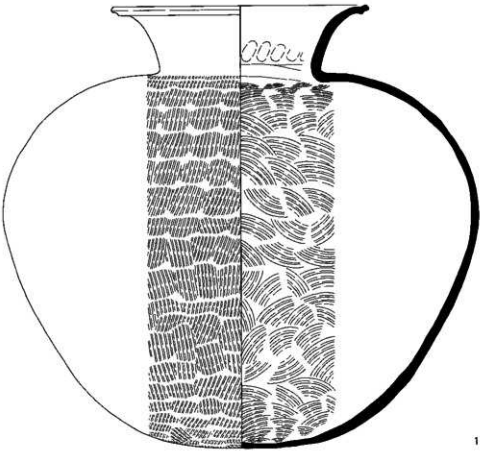

±1
712.80m
Ⅰ：暗褐色土（褐色石粒少量、炭微量）
Ⅱ：褐色土（炭微量）
±2
713.90m
Ⅰ：黒褐色土（黄色土粒少量、褐色土粒少量）
Ⅱ：暗褐色土（褐色砂塊微量、炭微量）
Ⅲ：褐色土（赤褐色土粒微量、炭少量）
±3
712.80m
Ⅰ：暗褐色土（褐色土粒中量、炭少量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色砂塊少量）
Ⅲ：褐色土（黄色砂塊多量）
±4
710.90m
Ⅰ：暗褐色土（褐色石粒・白色石粒少量、炭微量）
Ⅱ：褐色土（褐色石粒微量、炭微量）
±6
713.80m
Ⅰ：暗褐色土（φ1～2cmの礫少量）
Ⅱ：褐色土（暗褐色土塊少量）
±7
712.50m
Ⅰ：暗褐色土（褐色土塊少量）
Ⅱ：暗褐色土（褐色土塊少量、炭・焼土微量）
±8
712.50m
Ⅰ：暗褐色土（白色石粒少量）
Ⅱ：褐色土（白色石粒少量、焼土微量）
±9
712.40m
Ⅰ：暗褐色土（褐色石粒少量）
Ⅱ：褐色土（褐色石粒中量）
Ⅲ：褐色土（黒褐色石粒少量、炭少量）
Ⅳ：黄褐色土（深褐色土塊少量）
±10
713.10m
Ⅰ：暗褐色土（褐色土塊中量、炭少量）
Ⅱ：暗褐色土（炭少量）
Ⅲ：褐色土（暗褐色土塊微量）
±11
712.30m
Ⅳ
Ⅰ：暗褐色土（黄褐色石粒少量、焼土微量）
Ⅱ：暗褐色土（白色石粒少量、褐色石粒中量）
Ⅲ：暗褐色土（黄色砂塊微量、φ1～3cmの礫少量）
Ⅳ：褐色土（黄褐色石粒少量）
Ⅴ：暗褐色土（黄色砂塊多量）
±13
712.40m
Ⅰ：褐色土（黄色砂塊微量）
Ⅱ：褐色土（黄色砂塊・黒色砂粒多量）
±12
713.80m
暗褐色土（褐色土塊少量、炭微量）
±16
713.90m
Ⅰ：黄灰褐色土（φ0.1～0.5cmの礫微量）
Ⅱ：黒褐色土（黄色砂塊微量、φ0.1cmの礫微量）
±17
713.80m
Ⅰ：黄灰褐色土（φ0.1～2cmの礫微量、炭化物微量）
Ⅱ：黄灰褐色土（φ0.1の礫微量、黄色砂塊微量）
±18
714.90m
Ⅰ：黒褐色土（φ0.1～0.3cmの礫微量）
Ⅱ：黒褐色土（炭化物微量）
0
2m

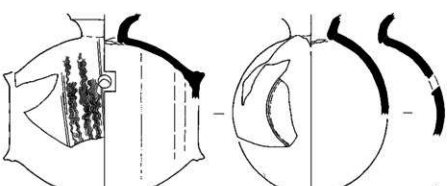
第11図　土坑


溝1
711.30m
Ⅰ：黒褐色土（黄色砂粒少量、炭中量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色砂粒中量、炭・焼土中量）
Ⅲ：褐色土（黄色砂粒少量、暗褐色土塊少量）
溝状遺構1
P4
P5
P6
P7
711.50m
暗褐色土（黄色砂粒少量、φ3～4cm礫中量）
溝状遺構2
710.80m
Ⅰ：暗褐色土（炭・焼土微量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色砂粒多量）
Ⅲ：褐色土（黄色砂粒少量）
Ⅳ：褐色土（黄色砂粒多量）
溝状遺構3
P21
711.30m
Ⅰ：暗褐色土（白色石粒少量、炭・焼土微量）
Ⅱ：褐色土（黄色砂粒少量、炭微量）
Ⅲ：暗褐色土
Ⅳ：暗褐色土（灰色土塊少量）
溝状遺構4
P23
P22
711.60m
Ⅰ：暗褐色土（黄色石粒微量、炭・焼土少量）
Ⅱ：暗褐色土（黄色石粒少量、白色石粒中量）
Ⅲ：暗褐色土（褐色土塊少量、白色石粒多量）
Ⅳ：褐色土（黄色砂粒中量）
溝・溝状遺構配置図
0
E5
E10
S65
S70
S75
S80
溝状遺構1
溝状遺構4
溝状遺構2
溝状遺構3
溝1
0
5m
0
2m

第12図　溝・溝状遺構

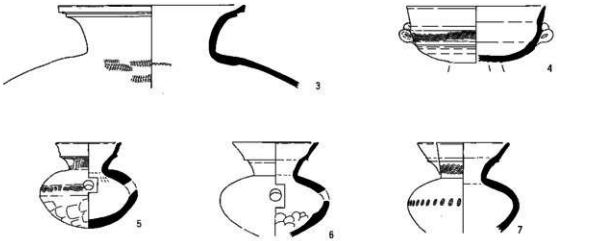
1号墳周溝（1・2）



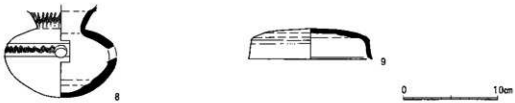


第13図　古墳出土土器（須恵器）1

1号墳周溝（3～7）



2号墳周溝（8・9）

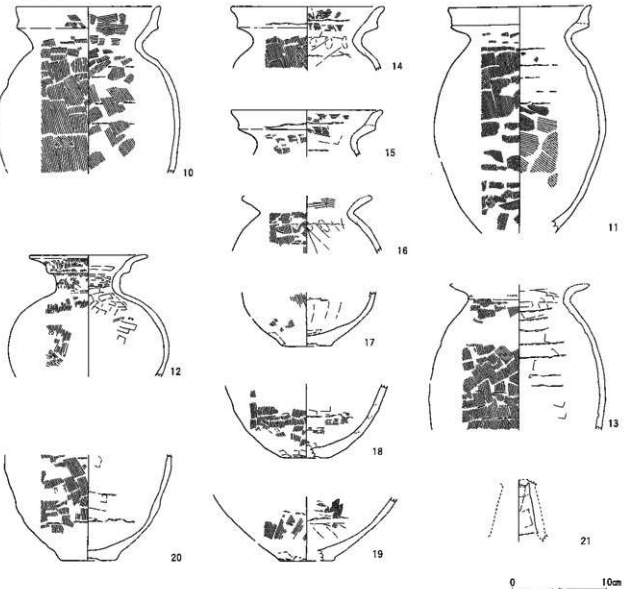


第５表　須恵器観察表

図No.	出土遺構	実測番号	器種	残存度		法量（cm）			胎土	色調	焼成	整形・調整・形態の特徴等
				口縁	底部	口径	底径	器高				
1	1墳周	1墳-1	壺	1/5	一部欠	(27.6)	—	47.4	雲母、炭色小石微粒混入	外：暗灰色～濃灰色 内：暗灰色～灰色	堅緻	外：ロクロナデ　タタキメ 内：ロクロナデ、工具ナデ、頸部に指頭圧痕 外面自然釉付着
2	1墳周	1墳-6	甑型鉢	—	—	—	—	—	炭色小石、微粒混入	外：暗灰色 内：暗灰色	良好	外：ロクロナデ、胴部縦波状文 内：ロクロナデ、外面全面に自然釉付着
3	1墳周	1墳-7	壺	一部残	—	(20.0)	—	—	長石混入	外：暗灰色～黄灰色 内：暗灰色～黒色	良好	外：ロクロナデ、タタキメ　内：ロクロナデ 外面に自然釉付着
4	1墳周	1墳-5	高杯	一部欠	—	14.8	—	—	長石、炭色小石微粒混入	外：暗褐色 内：暗灰色～黒灰色	堅緻	外：ロクロナデ、不規ちゃう削りのち縦ナデ 内：ロクロナデ 内外面自然釉付着、内面波目に転ぶり
5	1墳周	1墳-3	甕	1/10	—	(7.0)	—	(9.2)	長石混入	外：暗灰色～灰色 内：暗灰色～灰色	堅緻	外：ロクロナデ、不規ちゃう削りのち縦ナデ 頸部・胴部に波状文　内：ロクロナデ
6	1墳周	1墳-2	甕	4/5	—	9.2	—	—	長石、炭色小石微粒混入	外：暗灰色～灰色 内：暗灰色	堅緻	外：ロクロナデ、カキメ、刺下半部縦ナデ 内：ロクロナデ、波状押捺工具による刺突
7	1墳周	1墳-4	甕	一部残	—	(9.8)	—	—	長石、炭色小石微粒混入	外：暗灰色～灰色 内：灰色	堅緻	外：ロクロナデ、胴下半部縦ナデ、胴部櫛書状工具による刺突　内：ロクロナデ 内外面自然釉付着
8	2墳周	2墳-1	甕	一部残	完	—	—	—	長石、石英混入	外：暗灰色～濃灰色 内：暗灰色～濃灰色	良好	外：ロクロナデ、頸部ヘラ削りのち縦ナデ 頸部・胴部に波状文　内：ロクロナデ 内外面自然釉付着
9	2墳周	2墳-2	杯蓋	3/4	—	13.3	—	3.3	長石混入 内：暗灰色	外：暗灰色～灰褐色	堅緻	外：ロクロナデ、回転ヘラ削り 内：ロクロナデ　外面自然釉付着

第14図　古墳出土土器（須恵器）２

2号墳周溝（10～11）

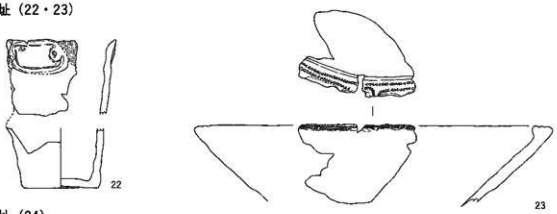


第6表　土師器観察表

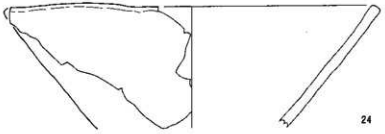
図No.	出土遺構	実測番号	器種	残存度 口縁	残存度 底部	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	胎土	色調	焼成	整形・調整・形態の特徴等
10	2墳周	2墳-4	壺	一部欠	—	15.4	—	—	褐色砂粒、灰色小石微粒混入	外：褐色～暗褐色 内：褐色～暗褐色	良好	外：胴部縦ハケメ 内：頸部横ハケメ、胴部縦ハケメ
11	2墳周	2墳-3	壺	3/4	—	15.2	—	—	長石、褐色砂粒、混入	外：褐色～暗褐色 内：褐色～暗褐色	良好	外：縦ハケメ、底部一部ハケメ 内：横ハケメ
12	2墳周	2墳-11	壺	1/6	—	(12.6)	—	—	石英、白・灰・褐色微砂～粗砂混入	外：橙褐色 内：橙褐色～暗褐色	良好	外：縦ミガキ、口縁部横ナデ 内：工具ナデ、頸部横ミガキ
13	2墳周	2墳-12	壺	一部欠	—	14.8	—	—	長石、白・灰・褐色微砂～粗砂混入	外：橙褐色～暗褐色 内：褐色～暗褐色	良好	外：縦ハケメ、内：工具ナデ
14	2墳周	2墳-6	壺	1/4	—	(15.5)	—	—	褐色、灰色小石微粒混入	外：褐色 内：褐色～暗褐色	良好	外：縦ハケメ、口縁～頸部横ナデ 内：工具ナデ、頸部横ハケメ、指頭圧痕
15	2墳周	2墳-7	壺	1/4	—	(16.3)	—	—	褐色砂粒、灰色小石微粒混入	外：褐色 内：褐色	良好	外：縦ハケメ、横ナデ 内：横ハケメ、工具ナデ
16	2墳周	2墳-5	壺	—	—	—	—	—	雲母、褐色・灰色微砂～粗砂	外：褐色 内：褐色	良好	外：胴部縦ハケメ 内：頸部横ハケメ、工具ナデ、指頭圧痕
17	2墳周	2墳-9	壺	—	3/4	—	5.6	—	褐色・灰色小石微粒混入	外：褐色～暗褐色 内：褐褐色	良好	外：縦ハケメ、底部工具ナデ 内：工具ナデ
18	2墳周	2墳-14	甕	—	1/2	—	(5.6)	—	白・灰・褐色小石微粒混入	外：淡褐褐色～黒褐色 内：褐褐色～黒褐色	良好	外：胴部縦ハケメ、底部工具ナデ 内：工具ナデ
19	2墳周	2墳-8	壺	—	3/4	—	6.1	—	褐色・灰色細砂～粗砂	外：暗褐色～灰褐色 内：暗褐色	良好	外：斜ハケメ、工具ナデ 内：横ハケメ、工具ナデ
20	2墳周	2墳-13	壺	—	2/3	—	(6.2)	—	白・灰・褐色小石微粒混入	外：褐色～暗褐色 内：褐色	良好	外：横ハケメ 内：工具ナデ（摩滅により不明瞭）
21	2墳周	2墳-10	高杯	—	—	—	—	—	褐色・灰色細砂～粗砂	外：暗褐色～褐色 内：褐色	良好	内：工具ナデ　摩滅が激しく調整不明

第15図　古墳出土土器（土師器）

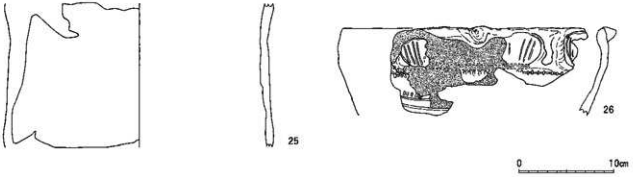
第２号住居址（22・23）



第４号住居址（24）



第５号住居址（25・26）



第７表　縄文土器観察表

図No.	出土遺構	実測番号	器種	残存度	法量（cm）口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	備考
22	2住	2住-2	小型深鉢	底部完、胴部1/5残存	(11.8)	6.1	—	石英、砂粒混入	淡褐色～暗褐色	やや良	外面スス付着、摩滅が激しい
23	2住	2住-1	浅鉢	口縁部～胴部1/5残存	(36.2)	—	—	石英、長石、雲母混入	褐色～暗褐色	やや良	摩滅が激しい
24	4住	4住-1	浅鉢か？	口縁部、胴部1/4残存	(45.3)	—	—	雲母、砂粒混入	暗褐色	やや良	摩滅が激しい
25	5住	5住-1	深鉢	胴部1/4残存	—	—	—	石英、砂粒混入	暗褐色～黒褐色	やや良	摩滅が激しく文様不明
26	5住	5住-2	深鉢	口縁部1/3残存	(27.8)	—	—	石英、雲母混入	暗褐色	良好	

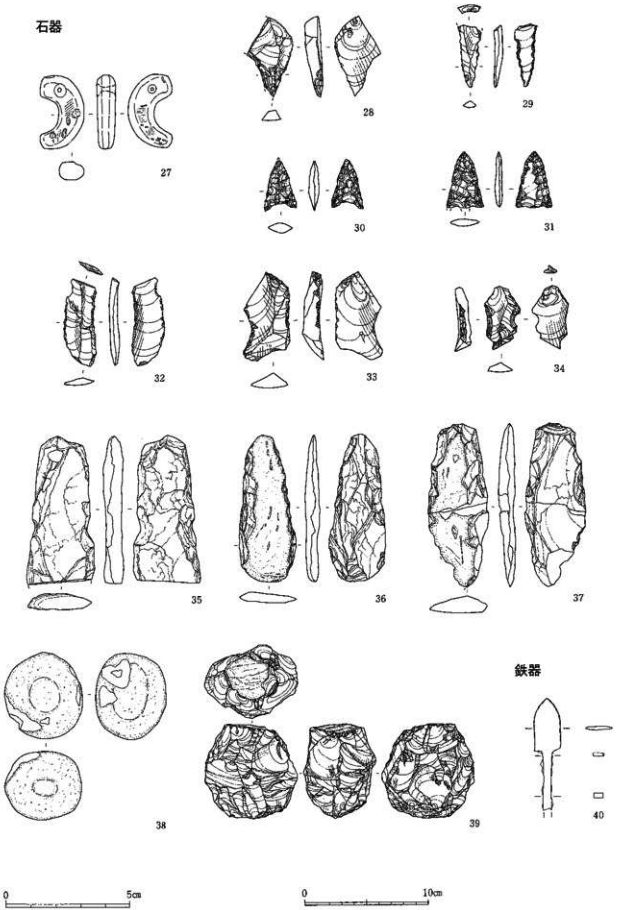
第８表　石器観察表

図No.	出土遺構	実測番号	器種	残存度	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	材質	備考
27	1竪穴	S3	石玉	完	3.0	1.8	0.8	4.5	メノウ	
28	1廃棄	S9	石鏃	基部欠	(3.2)	(1.9)	0.7	2.4	赤色チャート	
29	4住	S18	石錐	基部欠	(2.5)	0.9	0.4	0.1	赤色チャート	
30		S6	石錐	先端欠	(2.1)	1.3	0.5	0.4	チャート	
31		S11	石錐	基部欠	(2.2)	1.5	0.3	0.7	青灰色チャート	有茎錐
32	4住	S17	剥器	基部欠	(3.6)	1.3	0.4	0.9	黒曜石	
33	1廃棄	S5	石匙	基部欠	(3.5)	(1.9)	0.9	3.4	黒曜石	
34	検出面	S1	石鏃	先端欠	(2.5)	(1.5)	0.7	1.3	黒曜石	
35	4住	S15	打製石斧	先端欠	(11.8)	6.5	1.6	151.9	頁岩	側縁つぶし加工
36	1住	S13	打製石斧	ほぼ完	11.8	4.5	1.2	64.7	千枚岩	側縁つぶし加工
37	2住	S14	打製石斧	先端一部欠？	13.2	4.8	1.4	87.4	頁岩	
38	1廃棄	S10	不明	完	3.5	3.1	2.8	8.7	軽石	表面が平坦であり、研磨されたと考えられる
39	4住	S16	石棒	完	7.5	5.8	7.5	404.7	メノウ	

第９表　鉄器観察表

図No.	出土遺構	実測番号	器種	残存度	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	備考
40	1廃棄	ID1	鏃	ほぼ完	9.0	2.1	0.4	8.8	

第16図　住居址出土土器（縄文土器）



第17図　石器・鉄器

写真図版

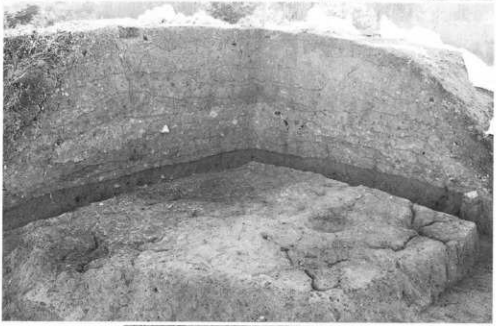
調査地から東側の風景

調査地から見た塩倉池

塚山 1 号墳墳丘(調査前)

写真図版 2

1号墳墳丘土層断面（3区）



1号墳墳丘土層断面（2区）

1号墳墳丘勾玉出土状況

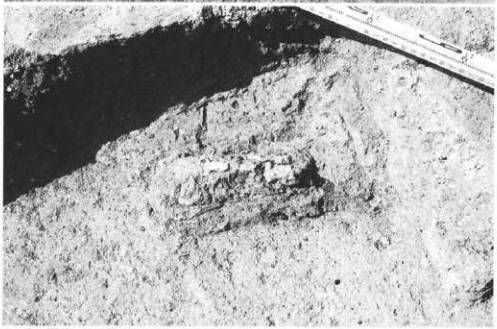
1号墳周溝A遺物出土状況
（3区）

1号墳周溝A遺物出土状況
（3区）

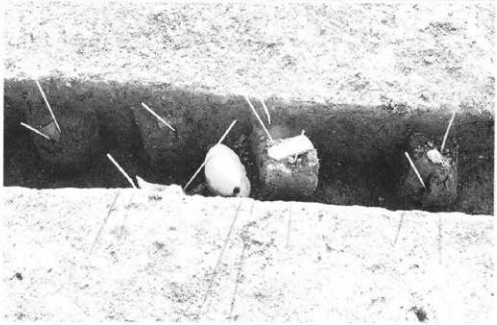
1号墳周溝A遺物出土状況
（3区）

写真図版 4

1号墳周溝A遺物出土状況
（4区）

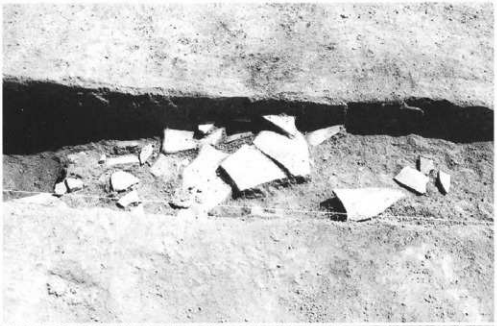


1号墳周溝A遺物出土状況
（3区）



1号墳周溝A遺物出土状況
（4区）

1号墳周溝A遺物出土状況
（3区）



1号墳周溝B遺物出土状況
（2区）

1号墳周溝B遺物出土状況
（4区）

写真図版6

1号墳周溝A完掘状況
（1区）

1号墳周溝A完掘状況
（2区）

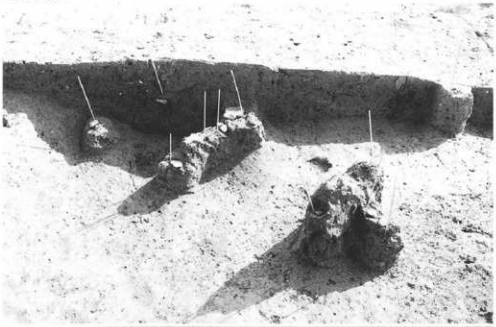
1号墳周溝A完掘状況
（3区）

1号墳周溝B完掘状況
（4区）

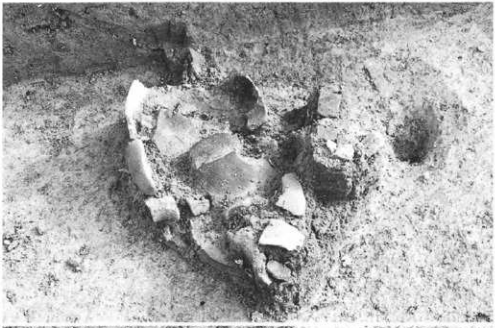
1号墳周溝Aと1号墳周溝B
完掘状況（2区開口部）

1号墳周溝Aと1号墳周溝B
完掘状況（4区開口部）

写真図版 8



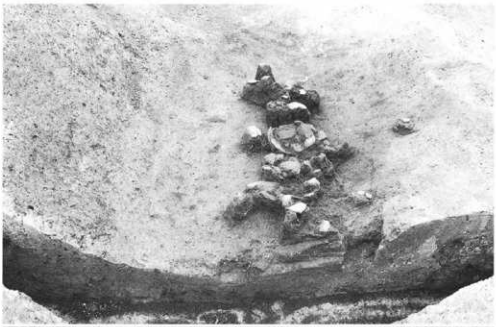
2号墳周溝遺物出土状況
（5区）



2号墳周溝遺物出土状況
（5区）

2号墳周溝遺物出土状況
（6区）

2号墳周溝遺物出土状況
（6区）



2号墳周溝遺物出土状況
（6区）

2号墳周溝遺物出土状況
（6区）

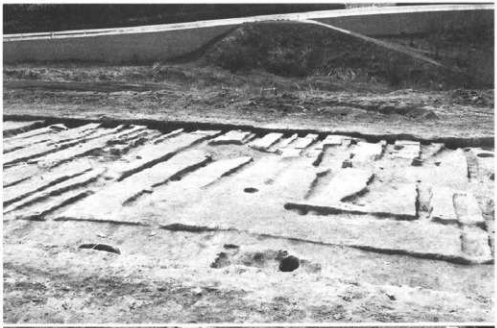
写真図版10

2号墳周溝発掘作業風景

2号墳周溝完掘状況
（5区）

2号墳周溝完掘状況
（6区）

2号墳周溝完掘状況
（5区開口部）



2号墳周溝と3号墳周溝
（手前が3号墳、奥が2号墳）

3号墳周溝完掘状況
（6区）

1住完掘状況
（8区）

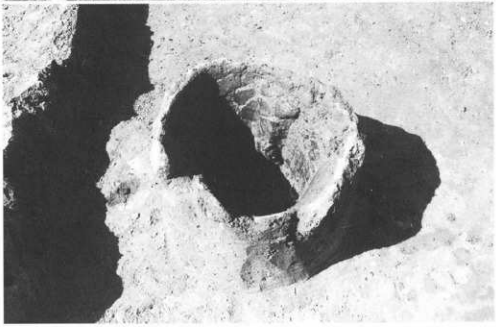
2住完掘状況
（7区）

3住完掘状況
（7区）

3 住埋甕炉出土状況
（7区）

4 住完掘状況
（8区）

4 住埋甕炉出土状況
（8区）



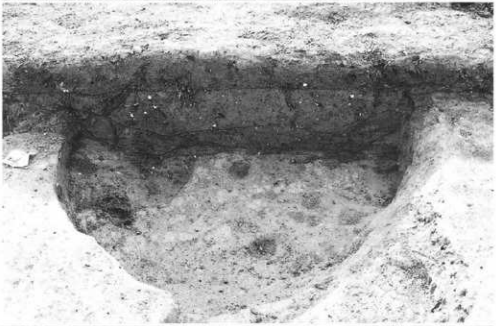
4住と3号墳周溝完掘状況
（8区）

5住完掘状況
（1区）

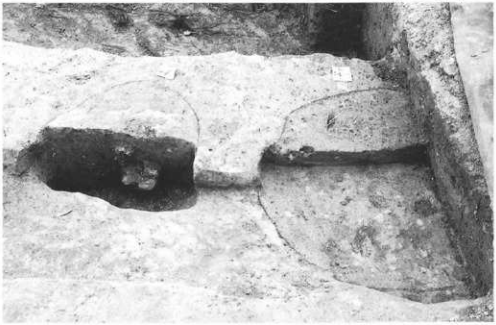
5住南東部炭化物出土状況
（1区）

5住埋甕炉出土状況
（1区）

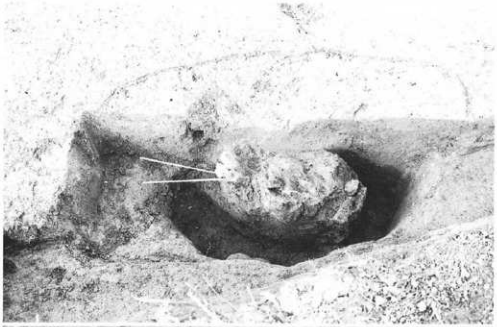
土16完掘状況
（5区）



土16・土17検出状況
（5区）



写真図版16



土18遺物出土状況
（5区）

溝状1完掘状況
（8区）

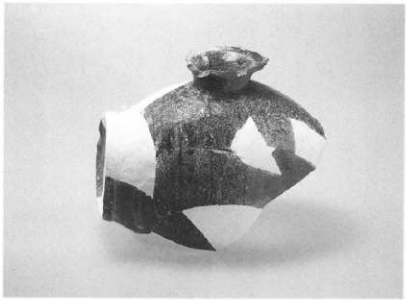
溝状4完掘状況
（8区）

溝状3完掘状況
（8区）

溝状2完掘状況
（8区）

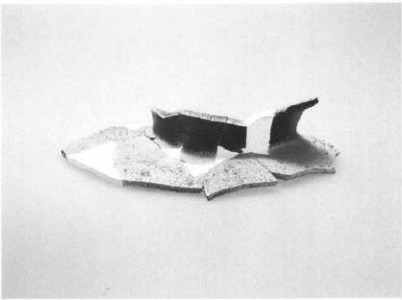
溝1完掘状況
（8区）

2　須恵器樽形瓶
（1号墳周溝）



4　須恵器高杯
（1号墳周溝）

3　須恵器甕
（1号墳周溝）

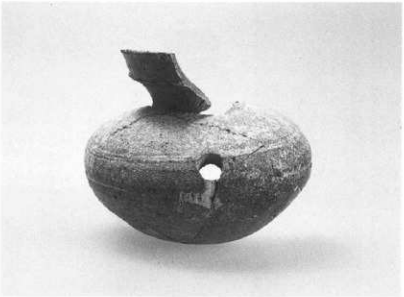


1　須恵器甕
（1号墳周溝）

6　須恵器甕
（1号墳周溝）

7　須恵器甕
（1号墳周溝）

5　須恵器甕
（1号墳周溝）



8　須恵器壺
（2号墳周溝）

9　須恵器杯蓋
（2号墳周溝）

2号墳周溝出土須恵器

10　土師器壺
（2号墳周溝）

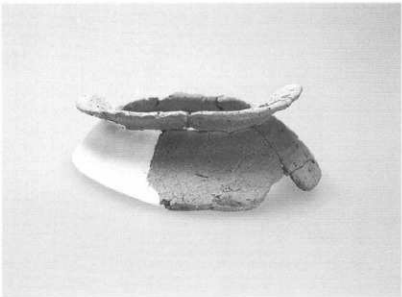
11　土師器壺
（2号墳周溝）

13　土師器壺
（2号墳周溝）

21　土師器高杯
（2号墳周溝）

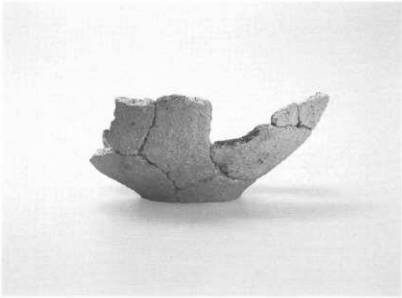
14　土師器壺
（2号墳周溝）

12　土師器壺
（2号墳周溝）



16　土師器壺
（2号墳周溝）

17　土師器甕
（2号墳周溝）

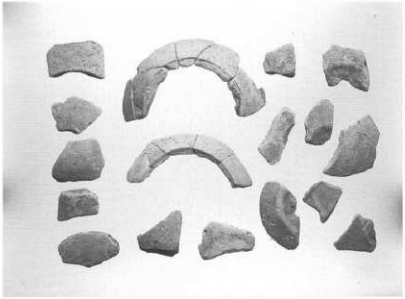


18　土師器甕
（2号墳周溝）

19　土師器甕
（2号墳周溝）

20　土師器甕
（2号墳周溝）

1号墳出土土師器



2号墳出土土師器

23　縄文土器(浅鉢)
(2住)

24　縄文土器(浅鉢？)
(4住)

25　縄文土器(深鉢)
(5住)

26　縄文土器(深鉢)
(5住)

22　縄文土器(小型深鉢)
(2住)

27　勾玉
（1号墳墳丘）

28　石錐
（1号墳周溝）

29　石錐
（4住）

38
（1号墳周溝）

39　石核
（4住）

33　石匙
（1号墳周溝）

34　石匙
（検出面）

32　削器
（4住）

35　打製石斧
（4住）

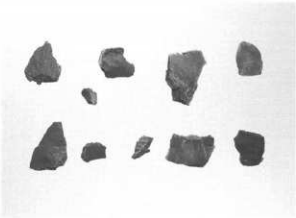
36　打製石斧
（1住）

37　打製石斧
（2住）

30　石鏃

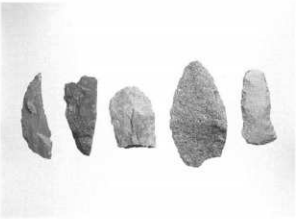
31　石鏃

本調査出土石器（黒曜石）



本調査出土石器（チャート）

本調査出土石器



本調査出土石器（石斧）

塩倉池遺跡跡Ⅳ・塚山古墳群緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	しおくらいけいせき4・つかやまこふんぐんきんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	塩倉池遺跡Ⅳ・塚山古墳群緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No.178
編集者名	菊池保夫・小山貴広
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号（〒390-0823 松本市大字中山3738番地1・TEL0263-86-4710）
発行年月日	平成17年3月25日（平成16年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しおくらいけ 塩倉池	ながのけんまつもとし 長野県松本市	20202	20	36度 15分 39秒	137度 57分 46秒	20040108 ～ 20040416	2335㎡	特別養護老人ホーム「浅間つつじ荘」移転改築による
つかやま 塚山 こふんぐん 古墳群	かわだしもひがし 岡田下岡田 677－1 他		29					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塩倉池	集落跡	縄文	竪穴住居址 5軒 土坑 18基 ピット 25基 溝 1基 溝状遺構 4基	縄文土器、石器	竪穴住居址は縄文時代中期
塚原古墳群	古墳	古墳	円墳 3基	須恵器、土師器、勾玉、金属製品	古墳時代中期（5世紀）の古墳群

松本市文化財調査報告178
長野県松本市

塩倉池遺跡Ⅳ
塚山古墳群

―緊急発掘調査報告書―

発行日　平成17年3月25日
発行者　松本市教育委員会
〒390-8620 長野県松本市丸の内３番７号
印　刷　川越印刷株式会社